

北来の太子に対する南明政権の対応について

滝 野 邦 雄

はじめに

福王政権下の南京では、「南渡三疑案」（僧大悲案・北来太子案（偽太子案）・偽妃童氏案）という疑獄が続いて起こる。とくに北来太子案（偽太子案）については、処分が下されないままに、福王政権が崩壊したために、福王政権に対して批判的な人たちのあたかも「ホンモノ」であったかのような発言が多く伝えられることになった。

では実際にはどうであったのか。この問題を考えるために、拙稿では、まず南明政権が北来（北來）の偽太子をどのように取り調べたかということを中心に検討してみたい。そうすることで、李清が『三垣筆記』で、

偽太子の「王之明」 屢しば訊（審問）され、百官 皆な偽なるを知る。然れども民間 猶お嘖嘖（議論紛紛）として真なりとするがごときなり（『三垣筆記』附識下・弘光）。と述べた、実態が明らかにできるのではないかと考えている。

そのため本稿では、（1）で北来（北來）の太子が南京に現れるまでの状況を、（2）で南明政権がどのように取り調べを行なったかを検討してみたい。

そもそも欽定『明史』（卷一百二十・列傳第八・諸王五・十四葉～十五葉：乾隆四年（一七三九）刊）によれば、崇禎帝には七人の男子がいた。そのうち四人は夭折し、崇禎十七年（一六四四）の時点では、第一子で皇太子となった慈烺、第三子の定王慈烜、第四子の永王慈炤が生存していた（なお、第三子の定王「慈烜」と、第四子の永王「慈炤」の名前については、孟森の「明烈皇殉國後紀」第二篇（『明清史論著集刊』所収・中華書局一九八四年第二次印刷）参照）。

ところが、弘光元年（順治二年〔一六四五年〕）に福王政権下の南京にあらわれた自称太子について、当時の様々な資料では、「太子」、時には「東宮」と述べられるだけで、崇禎帝の三人の太子の誰に相当するのか、問題になった形跡はない。最初から、皇太子「慈烺」であるという前提で議論されたためだと考えられる。ただ、福王政権が崩壊した直後の江南では、南京で「定王」が即位したとのうわさが広がっている（拙稿「順治二年（1645）の蘇州（2）」（『経済理論』第379号）参照）。

このことについて、偽太子案から六十年後に生まれた全祖望（字は紹衣、号は謝山。浙江鄞山の人。康熙四十四年（一七〇五）～乾隆二十年（一七五五）。乾隆元年丙辰科（一七三六）三甲三十六名の進士）は、

乙酉（順治二年〔一六四四〕）以後、東宮・二王の踪跡 雜出するも、皆な流傳 據る無

きの詞なり。南〔京にあらわれた〕偽の太子は則ち東宮に近似し、北〔京にあらわれた〕偽の太子は則ち永王に近似し、其の浮屠の一鑑^①は則ち定王に近似す。而して定王〔の名前が挙がること〕尤も多し……（『鮎埼亭集外編』巻二十九・題跋三・「題戾園疑跡二」）。

①『明季南略』（巻之三・「三皇子紀」条）・『明季甲乙兩年事略』（第二巻・「二巻異同補」条）に、順治八年に逮捕された自称三太子（定王）が、僧侶であった時に「號は雲庵、或いは一鑑と稱し、或いは起雲と稱す」とある。

と述べている。

管見の及ぶところ、專論としては、孟森が「明烈皇殉國後紀」第二篇（『明清史論著集刊』所収・中華書局一九八四年第二次印刷）、何齡修氏が「再談明清之際北南兩太子案」（『明清論叢』2009年號所収）において、南北で現れた崇禎帝の太子について考証を行なっている。また、竺沙雅章氏が、「朱三太子案について—清初江南の秘密結社に関する一考察—」（『史林』62巻4号：一九七九年）で、康熙四十六年（一七〇七）に崇禎帝の遺子といわれる朱三太子を奉じて起こった反乱とその背後関係について検討している。さらに、劉中平氏が「南渡三案述論」（『明史研究』第十二輯・2012年）で、主に福王政權中枢部に対峙した人たちの伝える資料に基づいて、三疑案の簡略な紹介を行っている。

（1）北の太子の情報

陳貞慧（字は定生、号は秋園・定道人・雪岑庵。宜興の人。明・萬曆三十二年（一六〇四）～清・順治十二年（一六五五）。崇禎三年（一六三〇）の副榜）によると、史可法（字は憲之、号は道隣。河南祥符の人。明・萬曆三十年（一六〇二）～弘光元年（一六四五）。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲二十六名の進士）や姜曰廣（字は居之、号は燕及・石井山房。江西新建の人。萬曆四十七年己未科（一六一九）二甲五十六名の進士）は、天子の擁立を考えたが、ためらってしまい決めることができなかった。それに対して鳳陽巡撫の馬士英（字は瑤草。貴州貴陽（貴州衛）の人。萬曆十九年（一五九一）～順治三年（一六四六）。萬曆四十七年己未科（一六一九）二甲十九名の進士：萬曆四十四年丙辰科（一六一六）會試に中式）は、北方の情報を入手するのに最も近い場所にいたことから、阮大鍼（字は集之、号は圓海、又の号は石巢・百子山樵。皖髯と称す。安寧府懷寧縣（今の安徽安慶）の人。萬曆十五年（一五八七）～順治三年（一六四六）。萬曆三十一年（一六〇三）、十七歳で舉人。萬曆四十四年丙辰科（一六一六）三甲十名の進士）を避難してきた福王のところに送り込み、朝晩ひそかに計画を立てて、劉澤清・高傑・黃德功・劉良佐の四人の軍閥に頼り、援助を得る。そして、盟約が成立し、五月一日に四人の軍閥の兵士をつれて福王を擁して南下し、即位させて「弘光帝」とした、という。

其の時（崇禎十七年四月）に當りて、司馬（史可法）・宗伯（姜曰廣）方に迎立を謀るも、寔に遲疑（躊躇）して未だ決せざるなり¹⁾。而して鳳泗巡撫の馬士英 北中の消息を得る

こと最も近きを以て、阮大鍼もて又た先ず福邸の中に竄身（藏身）さし、蚤夜（早晚）に密かに籌計（謀劃）し、劉澤清・高傑・黃徳功・劉良佐を挟みて援と爲す。約從（盟約）

既に定まり……五月朔日、四鎮の兵を以て福主を擁して南下し、改元して「弘光」と爲す……（康熙二十七年（一六八八）『山陽録一卷・書事七則一卷・秋園雜佩一卷』合刻本・「書事七則一卷」・四葉・「書甲申南中事」条）。

李自成によって北京が攻略され、政権が崩壊したとの情報が、副都の南京に伝わると、南京では、つぎの皇帝の擁立が問題となってくる。南京近郊に逃れてきた宗室のなかで、崇禎帝からの親疎を考えるならば、帝位を繼承するのは福王が最も適任であった。そこで、馬士英が、劉澤清・高傑・黃徳功・劉良佐などの將軍たちに話を付け、福王擁立に成功するのである。

しかし、崇禎帝の太子が生きていたとなると、事情は異なってくる。当然、成立したての福王政権では、政権の正統性を脅かしかねない崇禎帝の太子の情報に注目する。

そうしたところ、崇禎帝の三人の太子は殺害されたい、という報告が、六月十八日に藩鎮の劉澤清によって、七月十八日には淮揚巡按御史の王燮によって、福王政権に伝わる。ただし、それは、『明季南略』・『南渡録』・『金陵野鈔』で言うように、北京を脱出してきた顧元齡の聞いた「傳言」であったようだ。

『國權』は六月十八日の劉澤清の報告をつぎのように伝える。

〔崇禎十七年六月〕甲戌（十八日）……東平伯の劉澤清 奏すらく「錢塘の顧元齡、廣東陽春の典史に選ばる。京に在りて逃げ^{かえ}回りにて云う、皇太子 亂軍中に卒し、永・定の二王は王府二條巷に於いて遇害（殺害される）す……」（『國權』卷一百二・「思宗崇禎十七年六月甲戌（十八日）」条・六一二〇頁）。

劉澤清が「廣東陽春の典史に任命待ちの浙江錢塘の顧元齡は、北京に滞在していたが逃げ帰ってきて『皇太子は乱軍の中で亡くなり、定王・永王は北京の吳三桂の邸宅で殺された』と述べた」と報告してきた、という。

『明季南略』にも、劉澤清の報告を記している。

✓ 1) 陳貞慧の伝えるところでは、当時情報が錯綜していた。

〔崇禎十七年四月に〕余（陳貞慧） 又た遑（往）きて姜公（姜曰廣）に見ゆ。姜公（姜曰廣） 余（陳貞慧）を見て手を握りて喜びて曰く、一の佳訊（よい消息）有り。昨（きのう）史公（史可法）の書來りて「上（崇禎帝） 已に航海して南す。東宮も亦た問道より出ず」と云う、と。司馬（史可法）の札を出して余（陳貞慧）に示す。余（陳貞慧） 時に喜びに勝えず。之を沈子（沈柱）・盧子（盧象觀：江蘇宜興の人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百二十八名の進士）に告ぐ。一日ならずして、北中より逃入する者 踉蹌（慌ただしく急いで）として至りて云う、上（崇禎帝）は三月十九日に于いて煤山に自經す、と。繼ぎて至る者も亦た云う、田夫野老 巷哭（生前の遺徳をしのんでなげく）罷市（追悼の気持を表わし店をしめる）せざる者無し、と……（康熙二十七年（一六八八）『山陽録一卷・書事七則一卷・秋園雜佩一卷』合刻本・「書事七則一卷」・四葉・「書甲申南中事」条）。

史可法や姜曰廣たちは、皇太子の生存を信じていたため、「遲疑（躊躇）して未だ決せざるなり」となり、馬士英に先を越されてしまったとも考えられる。

甲申（崇禎十七年）六月十八日、劉澤清 奏すらく、「典史の顧元齡有り。係れ浙江錢塘の人なり。五月初二日に北京より出づ。傳言するに『皇太子 亂軍に卒す。其れ定王・永王は、俱に賊の走ぐるの日に王府二條巷の吳總兵宅内に於いて遇害（殺害される）す。皇城・宮殿・太廟・享殿・各門、亦た俱に焚毀す。惟だ正陽の一門のみ存す。其の前の三門の外は、焚劫 更に慘なり』と（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条：『明季甲乙兩年事略』（第二卷・「六月甲戌（十八日）」条）は「甲戌（十八日）、劉澤清奏、有典史顧元齡、自北京出、傳言皇太子卒于亂軍、二王遇害于二條巷」とする）。

劉澤清が、「浙江錢塘出身の典史の顧元齡は、五月二日に北京を出た。そして、『皇太子は乱軍の中で亡くなり、定王・永王は、李自成が北京から逃げだした日に王府二條巷の吳三桂の邸宅で殺された。城内・宮中・宮殿・太廟・享殿や各門はすべて焼失してしまい、正陽門だけが残っていた。それ以外の三つの城門の外は焼けて掠奪され、ほかに比べてさらに悲惨であった』と伝わっていたと言っていた」と奏上した、という。『明季南略』では、顧元齡の聞いた「傳言」によると崇禎帝の太子が亡くなったとしている。

『明季南略』は、それに続いて、

〔崇禎十七年〕七月十七日、「大事記」に王燮の塘報（軍事情報）を載す（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条）。

とある。おそらくこれは、『南渡錄』などに掲載される、七月十八日の王燮の報告のことであろう。すると、北京から逃げてきた顧元齡の証言が、六月十八日に劉澤清によって、七月十七日に王燮によって福王政権に伝えられたのではないかと推測できる。

『南渡錄』では、劉澤清の報告は記録せず、ただ七月十八日に前任の淮揚巡按の王燮が、皇太子・定王・永王は殺害されたと伝えてきたという。

〔七月癸卯（十八日）〕淮揚巡按の王燮（燮） 皇太子及び二王は皆な害に遇うを以て聞す。

時に未だ陽春縣の典史に任ぜられざる顧元齡有り。五月に於いて都を出で、親から闖の敗奔、吳三桂の西追し去げ訖（終わる）を被るを見る。又た傳言あるに、皇太子 亂軍に卒す。定王・永王は俱に賊の走ぐるの日に於いて吳三桂の宅内に遇害（殺害される）す。皇城・宮殿・太廟・享殿・各門 俱に焚え、惟だ正陽の一門を存す、前の三門の外は焚劫（放火掠奪）さるること更に慘なり、と。〔王〕燮（燮）〔顧〕元齡の言に據りて以て聞す。聞く者 流涕す（『南渡錄』卷之二・崇禎十七年（順治元年）七月癸卯（十八日）」条：

本稿では『南渡錄』は、江蘇古籍出版社一九九九年出版『南明史料（八種）』本を用いる）。

廣東陽春縣の典史に任命待ちの顧元齡という者がおり、五月に北京を脱出し、李自成が敗走し、吳三桂によって西に向かって追いかけられ逃げて行ったことを実見した。さらにまた、「皇太子は乱軍の中で亡くなり、定王・永王は、李自成が北京から逃げだした日に吳三桂の邸宅で殺害された。城内・宮中・宮殿・太廟・享殿や各門はすべて焼失してしまい、正陽門だけが残っていた。それ以外の三つの城門の外は焼けて掠奪され、ほかに比べてさらに悲惨であった」と

伝えられていたということを述べた。王燮は、この顧元齡の証言により、緊要なこととして上書して報告した。それを聞いた者たちは、泣いた、という。『南渡録』においても、崇禎帝の太子が亡くなったということは、顧元齡の聞いた「傳言」によるとしている。

また、顧炎武(字は甯人。顧亭林先生と称せられる。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年(一六一三)～清・康熙二十一年(一六八二)。明の諸生)の『聖安皇帝本紀』も、六月二十六日の王燮の報告のみ記録している。

[崇禎十七年(順治元年)六月壬午(二十六日)] 王燮(燮) 奏すらく、皇太子・定王・永王は俱に遇害(殺害される)す、と(『聖安本紀』 卷上)。

さらに、顧荅(字は雲美。江蘇蘇州の人。明の諸生)の『金陵野鈔』には、

[崇禎十七年(順治元年)七月辛亥(二十六日)], 巡按淮揚御史の王燮(燮) 奏すらく、「北京より逃げ回りし未だ陽春縣典史に任ぜられざる顧元齡の稱するに據るに、傳言に皇太子亂軍に卒す。定王・永王は俱に賊の走ぐるの日に於いて王府二條巷の吳總兵の宅内に遇害(殺害される)す。老吳總兵も亦た殺さる」と。吳總兵は、[吳] 三桂なり。老吳總兵の名は、驤なり(『金陵野鈔』 一卷・「崇禎十七年(順治元年)七月辛亥(二十六日)」条)。とあり、定王・永王は、吳三桂の父の吳驤とともに殺害されたという「傳言」があったと報告してきたという。『金陵野鈔』においても、崇禎帝の太子が亡くなったということは、顧元齡の聞いた「傳言」によるとしている。

黄宗羲(字は太沖、号は梨洲。浙江餘姚の人。明・萬曆三十八年(一六一〇)～清・康熙三十四年(一六九五)。明の諸生)の『弘光實錄鈔』も、七月十八日に王燮から報告があったことを記している。ここでも、六月十八日の劉澤清からの報告は記されていない。

[崇禎十七年(順治元年)七月] 癸卯(十八日), 淮揚巡按の王燮(燮) 「皇太后・[崇禎帝の] 子の永・定二王 皆な没す」と報ず(『弘光實錄鈔』 卷一・「崇禎十七年(順治元年)七月癸卯(十八日)」条)。

なお、この北來の太子がホンモノであるという可能性を認めていた黄宗羲は、それについてつぎのようなコメントを付している。

天下の人心 皆な先帝(崇禎帝)の後に繋げ、「吾君の子なり」と曰う。馬士英 密かに[王] 燮(燮)をして偽りて此の報を^{たてま}上つらしめ、以て人望を絶つ。後の皇太子の來るを觀れば、則ち[王] 燮(燮)の肉 其れ食うに足らんか(『弘光實錄鈔』 卷一・「崇禎十七年(順治元年)七月癸卯(十八日)」条)。

天下の人たちの希望は、崇禎帝の太子に掛かっており、太子のことを「吾君の子なり」といつていた。そのため、馬士英はひそかに王燮にこの偽りの報告を奏上させ、人々の希望を断ち切ろうとしたのである。後に皇太子がやってきたことからすれば、王燮の肉は食いつくしても足りないものである、という。

王燮²⁾ は、福王政権の崩壊直後の順治二年(一六四五)六月二十八日に、清政権に歸順し

✓ 2) 王燮について、『明季南略』は、つぎのようにいう。

〔王〕燮、字は雷臣、順天宛平の籍、湖廣王陵の人。崇禎庚午（崇禎三年：一六三〇年）の舉人、丁丑（崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲一百八十二名の進士）の進士。……夏允彝（字は彝仲、号は瑗公。江蘇華亭（浙江嘉善）の人。崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲一百十八名の進士：幾社の同人。福王政權崩壊後、郷里の江蘇松江で拳兵）嘗て其の經緯（計略）の大才有るを稱す。初め河南祥符の令に任ぜられ、三たび危城を守る。才識胆力 超絶（卓越）ならざるは無し。甲申（崇禎十七年：一六四四年）三月初九日淮安に蒞任し、〔路〕振飛と官民を鼓舞し、極めて勞績（功績）を著す……〔王〕燮 守河を自任（自身の職責とみなす）し、〔呂〕振飛に守城を託す。士民 恃み以て屹然たり（『明季南略』卷之一・「路振飛王燮鎮撫淮安」条）。

崇禎十七年（一六四四年）三月九日に、淮安巡按御史となり、鳳陽巡撫の路振飛（字は見白、号は皓月・三樹齋・白玉齋。直隸曲周の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲二十九名の進士：崇禎十六年に「僉都御史・總督漕運・巡撫鳳陽」に擢せられる。崇禎十七年（一六四四年）六月十四日に解任）とともに治安の維持につとめる。

崇禎十七年（順治元年）六月十六日、史可法によって山東巡撫に推挙される。

〔崇禎十七年（順治元年）六月〕壬申（十六日）、督師大學士の史可法 言う、「恢復の大計は、必ず先ず山東より始む。〔そこで〕巡按御史の王燮を任ず可しと薦む」と。章（奏本）吏部に下さる（『國榷』卷一百二・「崇禎十七年（順治元年）六月」壬申（十六日）」条・六一二〇頁）。

ただし、『明季南略』によると、転任昇進人事は、陳丹衷（應天府上元の人。崇禎十六年癸未科（一六四三）二甲三名の進士）の推薦によるという。

〔路振飛が辞任し〕、王燮 又た御史の陳丹衷の薦の爲に巡撫山東に陞す。〔路振飛とともに王燮までいなくなってしまうことから〕、士民 氣を奪わる（『明季南略』卷之一・「路振飛王燮鎮撫淮安」条）。

こうして、六月二十五日に、王燮は山東巡撫に任命される。

〔崇禎十七年（順治元年）六月辛巳（二十五日）〕王燮 右僉都御史・巡撫山東と爲る（『國榷』卷一百二・「崇禎十七年（順治元年）六月辛巳（二十五日）」条・六一二五頁）。

『南渡錄』も同じであるが、福王政權崩壊後に清政權に帰順して御史になったと付け加えられている。

〔六月辛巳（二十五日）〕御史の王燮を都察院右僉都御史・巡撫山東に陞す。南京 破れ、〔王〕燮 北（清政權）に降り、復た御史と爲る（『南渡錄』卷之一・「崇禎十七年（順治元年）六月辛巳（二十五日）」条）。

ただし、山東巡撫に任命されるものの、山東の情勢が不安定であったため、しばしば促されるも、赴任しなかった。そして、十二月二十二日には、山東領有の放棄が決まり、王燮は、そのまま待機するように命ぜられる。

〔崇禎十七年（順治元年）十二月〕乙亥（二十二日）、山東巡撫の王燮（燮） 淮安府安東縣に駐むを命ず。警（危急の情況）無きも城を守り、警（危急の情況）有れば河を防がしむ。登萊巡撫の王濬（王濬：山東益都の人。萬曆三十八年庚戌科（一六一〇）三甲一百五十二名の進士） 暫く淮上に駐め、以て委用（任用）を俟つ。又た原より派する山東餉銀（給与銀）三萬・〔山〕東と登〔萊〕二撫の銀米三十萬を省く。初め、〔王〕燮（燮）と〔王〕濬（濬） 皆な齊（山東）の事を以て超擢され、慨然（奮い立って）任行せんとす。已にして北兵の漸く熾んるを見て、遂に疑憚（猜疑心を持って懼れる）して進まず。屢しば科臣の黃雲師・梁應奇（四川嘉定州の人。崇禎十三年丁丑科（一六三七）三甲一百十一名の進士：碑文は「一百九名」に作る）の催がすを経て參す。工科右（工科給事中）の戴英 又た言う、「臣（戴英）

近ごろ聞くに二東の人心 本朝（明朝）を忘れず、郷勇の團聚するは十餘萬を降らず。若し〔王〕濬と〔王〕燮と蚤くに河を渡り收拾すれば、自から我が用と爲らん。今、督撫の重臣 逗留すること此の如し。地方に於いては何を可望まん。臣（戴英） 謂えらく、二臣の初意は、原より官を騙すに過ぎず。官 已に手に入るに迫れば、則ち兵部に向かいて兵を求め、戸部に向かいて餉を求め、工部に向かいて衣甲器械を索む。〔これは〕、種種の應手する能わざる事に借り、以て曲げて規避（なんとかして回避する）を遂げんとすればなり。而して疆事 已に大いに潰ゆ。臣 謂えらく、昔 東省を壞す者は、虜と寇なり。今 東省を棄つる者は、〔王〕濬（濬）と〔王〕燮（燮）なり。若し嚴しく處治を行ない、立どころに斧鉞（刑罰）を正しくせざれば、〔尤めて之に効い〕（明らかに過ちだと認めながら、それに倣う：『左傳』

て、「^{まこと}良に嘉悦す可し」（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之十七・「順治二年六月己卯（二十八日）」条）とされ、順治三年（一六四六）三月三日、江西道監察御史に任ぜられている（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之二十五・「順治三年。丙戌。三月己酉（三日）」条）ことから、黄宗羲の印象がよくなかったのかもしれない。

また、王燮は、七月十八日の時点では、淮揚巡按から山東巡撫に転任昇進している。馬士英とのかかわりでいうと、淮揚巡按の王燮と共に治安維持に努力した鳳陽巡撫の路振飛の後を受けて五月十七日に鳳陽巡撫になった田仰が、「馬士英の私人」であったといわれる（『明季南略』卷之一・「路振飛王燮鎮撫淮安」条による）。

なお、江蘇太湖西洞庭山の角里に避難していた薛宗（字は諸孟，号は歳星・米堆山和尚。江蘇武進の人。崇禎四年辛未科（一六三一）二甲三十名の進士）は、七月二十四日に太子たちが殺害されたと聞いたという。『薛諸孟筆記』につぎのようにいう。

北より回る人の報を得るに、皇太子・二王 已に遇害（殺害される）す（『薛諸孟筆記』上冊・二十葉・「七月二十四日記」条）。

『明季南略』・『明季甲乙彙編』・『明季甲乙兩年事略』のみであるが、八月二十九日に、北からたどり着いた宦官の高起潛が福王弘光帝に拝謁したと記し、それに続けて太子を奉じて南京に來たものの、朝廷では、このことを諱んだと伝えている。

〔崇禎十七年（順治元年）〕八月二十九日、北來の太監の高起潛を召して陛見す。〔高〕起

僖公二十四年に「尤而效之，罪又甚焉（^{とが}尤めて之に^{なや}効うは，罪 又た甚だし）」、未だ止息すること有らざるを恐る」と。時に明旨もて屢しば催すも，竟に行かざるなり。是に至り，遂に三齊を棄つるを決し，二人の淮に駐するを聽す。工科都〔給事中〕の李清 曾て閣臣の〔馬〕士英に言いて「國法 宜しく振うべし」と謂う。〔馬〕士英 但だ曰う「人 我の憤憤（憂愁する）なるを言い，後人 當に我の憤憤（おろか）なるを思ふべし」と（『南渡錄』卷之一・「崇禎十七年（順治元年）十二月乙亥（二十二日）」条）。福王政權の崩壊直後の順治二年（一六四五）六月二十八日に，清政權に歸順して，「良に嘉悦す可し」とされる。

〔順治二年（一六四五）六月己卯（二十八日）〕故明總兵の高進忠，部將の黃中色等六十七人と都御史の王燮・御史の蘇京（山東安東の人。崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲五十四名の進士）を率いて，自海中雲臺山より上表して降るを請う。旨を得て，江南 既に版圖に入り。天下一統す。朝廷 方に羅俊傑を招き，廣く包容を示さんとす。總兵の高進忠，併せて文官の王燮・蘇京 投誠して歸順す。良に嘉悦す可し（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之十七・「順治二年六月己卯（二十八日）」条）。

順治三年（一六四六）三月三日、江西道監察御史に任ぜられる。

〔順治三年（一六四六）三月己酉（三日）〕王燮 江西道監察御史と爲る（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之二十五・「順治三年。丙戌。三月己酉（三日）」条）

順治五年七月辛卯（二十八日）には，下役の贈賄のために，三級を降して離任（降三級調用）処分となる。

〔順治五年七月辛卯（二十八日）〕降兩浙巡鹽御史の王燮の三級を降して調用す。濫（虚妄不實）なる屬員（下役の汚職）を以ての故なり（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之三十九・「順治五年七月辛卯（二十八日）」条）。

潛 實に太子を奉じて海に浮び南朝に至る。朝論 之を諱む（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条：『明季甲乙彙編』（卷之二・「崇禎十七年（順治元年）八月甲申（二十九日）」条）・『明季甲乙兩年事略』（第二卷・「崇禎十七年（順治元年）八月甲申（二十九日）」条）も同文）。宦官の高起潛は、北來太子と関係する高夢箕（(2)で検討する）の親族であることから、太子を保護して南に逃れてきたとの憶測が生じ、「朝論 之を諱む」と付け加えられるようになったと考えられる。

九月一日になると、撫寧侯の朱國弼が太子・二王に諡号を贈り、続いて殉難した臣にも諡をあたえてほしいと願い出る。その結果、禮部に諡号を検討するよう命ぜられる。しかし、禮部は、太子たちの消息がはっきりしないことから、ひとまずはゆっくりと諡号を検討した、という。

〔九月丙戌（一日）〕撫寧侯の朱國弼 先ず太子・二王の諡を上つり、次に難に死する諸臣に及ばんことを請う。禮部に命じて議奏（検討して意見をまとめ皇帝に上奏する）さす。

禮部 太子等の薨問の未だ確ならざるを以て、姑く之を緩（ゆっくり）す（『南渡錄』卷之三・「九月丙戌（一日）」条）。

この記事が、『明季南略』や『國權』では、諡號を贈るという提案者に趙之龍の名前も加えられ、太子が生きていて南方に現れたという噂が出てくるのを断ち切るためであったという説明が付け加わる。

九月丙戌朔、朱國弼・趙之龍 太子及び定・永二王の諡を上つらんとす。時に太子南來〔説〕を傳うるあり。〔朱國弼・趙之龍の提案は〕、之を断たんと欲すればなり（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条：『明季甲乙彙編』（卷之二・「崇禎十七年（順治元年）九月丙戌朔」条）・『明季甲乙兩年事略』（第二卷・「崇禎十七年（順治元年）九月丙戌朔」条）も同文）。

『國權』も、同じく、

〔九月朔丙戌（一日）〕撫寧侯の朱國弼・忻城伯の趙之龍 故太子及び二王の諡を請う。時に太子南來〔説〕を傳うるあり。〔朱國弼・趙之龍の提案は〕、之を断たんと欲すればなり（『國權』卷一百三・「思宗崇禎十七年九月朔丙戌（一日）」条・六一四四頁）。

とする。

実際のところは、翌年の弘光元年（順治二年）二月十一日になって、皇太子・二王に諡号が贈られているので、『南渡錄』が伝えることが事実を伝えているのではないかと考えられる。

これも、太子はホンモノだとする立場の『明季南略』の伝えるところであるが、十一月一日に、北來の太子は南京の興教寺にこっそりと移住した。高起潛はひそかに馬士英に告げたところ、殺害しようと人を派遣したが、一日前にのがれたという。

十一月乙酉朔、太子 興教寺に潛居す。高起潛 私かに馬士英に聞し、人を遣りて之を殺さしむ。〔しかし〕至るに及び、太子 已に先の一日に江を渡り南して遁る（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条：『明季甲乙彙編』（卷之二・「崇禎十七年（順治元年）十一月乙酉朔」条）・『明季甲乙兩年事略』（第二卷・「崇禎十七年（順治元年）十一月乙酉朔」条）も同文）。

『弘光實錄鈔』によると、十二月十二日に清政權と和平交渉に派遣されていた陳洪範が戻ってくる。陳洪範は、北から逃れてきた人たちに尋ねると、皆は「皇太子は李自成によってすぐに殺害され、永王・定王は、李自成が敗れた時に殺害された」などと言った、と奏上する。ただこれは、六月十八日に藩鎮の劉澤清によって、七月十八日には淮揚巡按御史の王燮によって報告された顧元齡の伝えた「傳言」と似ている。

〔崇禎十七年(順治元年)十二月〕丙寅(十二日), 陳洪範 北に使して回り召對さる。〔そこで, 陳〕洪範 奏すらく「……臣(陳洪範) 遍く北來の諸人を訪ねるに、^み僉な謂う流賊 清兵の將に至らんとするを聞き、先ず皇太子を殺し、二王を馬上に挟みて偕に行き迎戦す。永平 利を失い、二王 隨い亦た害を受く。害を受くるの地は、實報無しに迄る。今、僅かに公主を存す。先帝(崇禎帝) 其の壹手を傷つくも、養われて周皇親の家に在り……」と(『弘光實錄鈔』卷一・「崇禎十七年(順治元年)十二月丙寅(十二日)」条)。

『南渡錄』は、

時に〔陳〕洪範 亦た疏もて言うに「皇太子 北兵の將に至らんとするに因り、先ず賊の^{ため}爲に手弒さる。^た止だ二王を馬上に挟みて行き永平に迎戦す。利を失い、二王 亦た害を受く」と(『南渡錄』卷之四・「崇禎十七年(順治元年)十二月己巳(十五日)」条)。

と記し、陳洪範の帰還を十二月十五日に掛ける(『聖安皇帝本紀』も十五日に掛けているが、そこに記録される上奏文には、三人の太子についての記述は省略されている)。ただし『南渡錄』の著者の李清は、この報告を「實據無きなり」とするコメントを付け加えている(『三垣筆記』(筆記下・弘光)では「後、陳洪範 歸り、皆な闖の爲に殺さると言うは、亦た未だ確ならず」という)。

この陳洪範の上奏文を承けてかどうかは断定できないが、管紹寧(字は幼承、号は泰階。江蘇武進の人。?～弘光元年(順治二年)閏六月二十九日(西暦:一六四五年八月二十日)。崇禎元年戊辰科(一六二八)一甲三名(探花)の進士)が十二月二十四日に、崇禎帝の皇太子は間違いなく殺害されたので、翌年二月に皇太子のために成服(規定された喪服を着ること)するよう命令を出してほしいという。

十二月二十四日戊寅、管紹寧 言う、東宮は確然として遇害(殺害される)されれば、明年二月に東宮の爲に制服するを命ず〔るを請う^①〕、と(『明季南略』卷之二・「太子雜志」条:『明季甲乙兩年事略』(第二卷・「崇禎十七年(順治元年)十二月戊寅(二十四日)」条)と『明季甲乙兩年事略』(第二卷・「崇禎十七年(順治元年)十二月戊寅(二十四日)」条)とは同文。『國權』(卷一百三・「思宗崇禎十七年十二月戊寅(二十四日)」条・六一七一頁)は「二月」を「三月」に作る)。

①『甲乙事案』卷下・「二月」条にしたがって付け加えて読む。

『南渡錄』では、日付は同じ十二月二十四日であるが、「二月初旬に崇禎帝の太子のために成服(規定された喪服を着ること)を検討せよとの指示が出たが、禮部は、年頭は慶事が多く、

このことを提案しなかった。そして、そののまま福王政権が崩壊した」と伝えている。

〔崇禎十七年（順治元年）十二月〕戊寅（二十四日）、弘光元年二月初に于いて日を擇び、東宮・二王の服を成さんことを命ず。

禮部 歲初は多慶なるを以て竟に未だ成服（規定された喪服を着ること）を議（提案）せず。而して國亡ぶ（『南渡錄』卷之四・「崇禎十七年（順治元年）十二月戊寅（二十四日）」条）。

弘光元年（順治二年）二月二日になると、李清の提案によって、崇禎帝の「思宗」という廟號の変更と崇禎帝の太子たちの諡を提案することが認められる。

〔弘光元年（順治二年）二月〕乙卯（二日）、命じて〔崇禎帝の〕「思宗」の廟號を改め、并せて東宮・二王の諡を議す。工科都〔給事中〕の李清の言に従うなり。

疏に言う、「臣（李清）記〔憶〕するに泰昌の初め、神宗〔の廟號〕を擬して「恭宗」と曰う。「恭」の美名を以てするのみ。但だ晉・隋の諸々の「恭帝」は皆な位を遜るを以て〔「恭」と〕諡されるに因る、則ち美は反って疵（欠点）と爲る。「恭」を易えて「神」とするは、變の正なり。〔いま、崇禎帝の廟號に〕「思」の諡と爲すが若きは、亦た晉人の國を亡ぼせし〔三國蜀の後主〕劉禪に諡する者なり。一は昏庸、一は英明、行を異にし號を同じくす。美なりと雖も、亦た疵（欠点）あり。乞う部に敕（皇帝が命令を出す）し、酌議（協議）させ、或いは廟號を易え、或いは〔もともとの諡號の〕「烈」を以て廟號と爲し、而して諡は則ち另に議せんことを。若し明詔 既に頒たれば、中改するに難しと謂うならば、則ち何ぞ此の東宮・二王の將に成服を議（提案）せんとするの時に乗ぜんや。先帝（崇禎帝）の廟號を更め議する者を以て、并せて東宮・二王の諡を議し、然る後に同じく海内に詔し、前誤を矯正すれば、盛舉なり。亦た往例（先例）あるなり」と。之を允（承諾）す（『南渡錄』卷之四・「弘光元年（順治二年）二月乙卯（二日）」条）。

李清の疏には、「泰昌帝が即位された時、神宗萬曆帝の廟號を「恭宗」とする草案を作った。「恭」に美名が含まれているからである。ただし、晉や隋における「恭帝」は、すべて位を譲り渡したことから「恭」と諡されている。美点がかえって欠点となっている。したがって「恭」を「神」に変更したには、正しい変更の仕方であった。さていま崇禎帝の廟號に「思」としたのは、晉人が三國蜀の亡国の君主の後主劉禪に諡號を贈ったのと同じになってしまう。ひとりは昏庸で、ひとりは英明である。行動を異にしているのに諡號が同じになっている。「恭」という文字は優れているとしても、また欠点がある。そこで、当該部署に命令をお出しになって、協議させて、あるいは廟號を変更するか、あるいはまた諡號の「烈」字を「烈宗」という廟號に変更し、そして、諡號は、別に提案させることを願う。詔が公布されれば、途中で変更することは困難だということであれば、どうしてこの皇太子・定王・永王三人の太子のために喪服を定めることを提案しようとする機会を利用しないのだろうか。先帝（崇禎帝）の廟號の変更の提案と、皇太子・定王・永王三人の諡號の提案とをあわせて、その後で、一緒に内外に詔して、崇禎帝に「思

宗」という廟號を贈ったという誤りを訂正すれば、盛舉である。こうしたことは、先例がある」とあった。そして、それは、承認された、という。

こうして、二月十一日に三人の諡號が提案される。『南渡錄』は、

〔弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）〕皇太子慈娘に諡して「獻愍」と曰い、定王慈煥に〔諡して〕「哀」と曰い、永王慈燦に〔諡して〕「悼」と曰う（『南渡錄』卷之四・「弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）」条）。

と記すだけである。『金陵野鈔』も同じように伝える。

〔弘光元年（順治二年）二月〕甲子（十一日）、皇太子慈娘に諡して「獻愍皇」と曰い、三子の定王慈燦に〔諡して〕「哀皇」と曰い、四子の永王慈煥に〔諡して〕「悼皇」と曰う（『金陵野鈔』一卷・「弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）」条）。

さらに、『國權』も、

〔弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）〕故皇太子に「獻愍」と諡し、永王に「悼」と諡し、定王に「哀」と諡す（『國權』卷一百四・「弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）」条・六一八三頁）。

と記すのみである。

ところが、『明季南略』では、管紹寧が皇太子に「獻愍」、永王に「悼」、曰い、定王に「哀」という諡號を贈るようお願い出た。この時には、定王は〔藩鎮の劉澤清によって〕海に沈められ、皇太子は浙江紹興に逃れた。福王弘光帝は、宦官を派遣して、ひそかに召し出そうとした。管紹寧が諡號を贈ることを求めたのは、まず諡號を定めて、太子が生きていて南方に現れたという噂が出てくるのを断ち切るためであったという説明が加わる。

乙酉（弘光元年〔順治二年〕）二月十一日甲子に至り、〔管〕紹寧 皇太子に諡して「獻愍」と曰い、永王に〔諡して〕「悼」と曰い、定王に〔諡して〕「哀」と曰うを請う。時に定王

已に海に沈められ^①、皇太子 方に紹興^のに遯る。上（福王弘光帝）密かに内使をして之を召さしむ。〔管〕紹寧 先ず諡を定め、以て絶つを示すなり（『明季南略』卷之二・「太子雜誌」条：『明季甲乙彙編』（卷之三・「弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）」条）・『明季甲乙兩年事蹟彙略』（卷之三・「弘光元年（順治二年）二月甲子（十一日）」条）も同文）。

①『國權』（卷一百四・「弘光元年三月甲申朔日」条・六一九〇頁）の割注に、「劉澤清 定王を海中に沈む」とある。当時、福王政権の意向をうけて、藩鎮の劉澤清が、定王を海に沈めたという噂されていたようだ。

ただし、(2)で検討するが、太子たちの諡號が決定したとの詔が天下に公示されたのは、弘光元年（順治二年）三月十六日のことである。

こうしたことをまとめて『甲乙事案』は、つぎのようにいう。

禮部署部事左侍郎の管紹寧 皇太子及び二王の諡を上つる。

去夏、劉澤清 奏するに「典史の顧元齡 北都より出でる有り。〔そして〕傳言ありて「皇

太子 亂軍の中に薨じ、二王 二條巷に遇害す」とす。朱國弼・趙之龍 隨いて合疏して「太子・二王の諡を上つるを請う」と。管紹寧 復た疏もて言うに「東宮は確然として遇害（殺害される）す。明年二月に於いて東宮の爲に制服（規定された喪服を着ること）するを請う」と。今春、李清 疏もて先帝（崇禎帝）の「實錄」を修め、廟號を改易せんことを請い、并せて東宮・二王の諡を上つり定めんことを催す。是に至り〔管〕紹寧 皇太子の諡を上つりて「獻愍」と曰い、永王の諡を「悼」と曰い、定王の諡を「哀」と曰う。之を允す（『甲乙事案』卷下・「二月」条）。

弘光元年（順治二年）二月に管紹寧が皇太子と定王・永王の諡號を奉った。そもそも、昨年夏に藩鎮の劉澤清が「典史の顧元齡が北京より脱出した。そして、「皇太子は乱軍のなかで亡くなり、定王・永王の二人は二條巷で殺害された」との伝聞がある、と言ってきた。朱國弼・趙之龍がそれをうけて、皇太子と定王・永王に諡號を贈ることを提案した。管紹寧は、「皇太子は、明らかに殺害されているので、弘光元年（順治二年）二月を期して皇太子のために喪服を着てもらいたい」と願い出た。今年のはじめになって、李清が、崇禎帝の「實錄」を編纂し、その廟號の変更を願い出て、さらに皇太子と定王・永王の諡號を制定することを催促してきた。ここにいたって、管紹寧は皇太子に「獻愍」、永王に「悼」、定王に「哀」という諡號を提案し、それが認められた、という。

このように福王政權は、崇禎帝の三人の太子たちが亡くなったという報告をうけて、諡號などを検討し、公示したのである。もっとも、福王政權の中枢部の馬士英などに対して批判的な立場の人たちは、そこに福王弘光帝の正統性を強化しようとする思惑が潜んでいると考えることから、いろいろな憶測を付け加えている。

(2) 太子あらわれる

溫睿臨（字は鄰翼，一字は令貽。浙江烏縣（今の吳興）輯里の人。康熙乙酉科（康熙四十四年：一七〇五年）の舉人）の『南疆逸史』は、北來の太子が現れてからの、福王政權の対応を、つぎのように述べる。

〔弘光元年（順治二年）二月〕癸未^①（三十日）……鴻臚寺少卿の高夢箕「先皇帝（崇禎帝）の太子 北より來る」と奏するあり。〔そこで〕内臣を遣りて蹤迹（追跡調査）して杭州に至り、之を得。三月甲申朔、京に至り、興善寺に駐む。太監の李承芳・盧九德等 審視（仔細に觀察する）し還り報ず。夜五鼓（午前四時から六時）、移して掌錦衣衛都督同知の馮可京の邸舎に至る。乙酉（二日）、上（福王弘光帝）武英殿に御し、府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道及び前の東宮講官中允の劉宗正・李景濂と少詹事の方拱乾等に命じて太子を審視さすに、問答 多く符せず。大學士の王鐸 叱りて假と爲す。久之、自から稱して「王之明」にて故の駙馬都尉の王昺の姪孫と爲す。奏し上つる。丙戌（三日）、中城（城

内)の兵馬司の獄に下す……(五十六卷本『南疆逸史』卷一・紀略第一・安宗:中華書局一九五九年出版活字本・八頁)。

①高夢箕の奏上と、太子を杭州に探し出したという記事は、二月癸未(三十日)に掛けてあるが、日時に混乱があると思われる。杭州で探し出された翌日の三月一日に南京に到るのは困難であると考えられるからである。

鴻臚寺少卿の高夢箕が、「先皇帝(崇禎帝)の太子が北よりやってきた」と奏上してきた。そこで、宦官を派遣して追跡調査して、杭州で見つけ出した。三月一日に南京に到着し、興善寺に滞在させた。宦官の李承芳・盧九德などが詳しく観察してもどって報告した。翌日の午前四時から六時ころに、掌錦衣衛都督同知の馮可京の官邸に移動させた。二日に福王弘光帝は、武英殿にお出ましになって(臨まれる)、府(南京)の[六]部の大小の九卿科道官及び前任の東宮講官中允の劉宗正と李景濂や少詹事の方拱乾などに北來の太子を詳しく審査させたが、北來の太子の受け答えはちぐはぐであった。大學士の王鐸が叱りつけて「ニセモノ」だとした。しばらくしてから、みずから「王之明」といい、故の駙馬都尉の王昺の姪孫であると言い出した。そこで、そのことを奏上した。三日に南京城内の監獄にくだした、という。

そして、九日には、すべての官僚に命じて午門の外で立ち合わせて取り調べをさせた。

[弘光元年(順治二年)三月]壬辰(九日)、百官に命じて王之明を午門外に會審(立ち合い審査)す(五十六卷本『南疆逸史』卷一・紀略第一・安宗:中華書局一九五九年出版活字本・八頁)。

十五日には、三法司(刑部・都察院・大理寺:重大案件は三法司が取り調べる。また、人を死刑に定めるには三法司の議を経ることが必要であった)が、「王之明」についての取り調べを奏上した。そしてふたたび、「王之明」のこれまでの経路と首謀者とを厳しく取り調べさせた。それより前、太子が現れると、都の人たちはみな喜んだ。そして、福王弘光帝にはまだ子供がいないので、その太子を跡継ぎにできると考えた。ところが、「ニセモノ」だという結果になって、人々は心配し、民間では馬士英・王鐸を指して太子を亡き者にしようとなくらんでいるとデマを言い合った。藩鎮の黃得功は、「王之明」をそのままにしておくように奏上した。そのため、福王弘光帝は、獄中で過ごさせることを命じて、とうとう刑罰を加えなかった。また、藩鎮の劉良左が、偽太子と自称妃の童氏の問題のことに言及し、「福王弘光帝は群臣に欺かれている」と言い出してきた。こうしたことから、司法に命じて判決文を配り、内外に伝え示し、様々な疑惑を晴らそうとした。しかし、デマはますますひどくなった。

戊戌(十五日)、三法司(刑部・都察院・大理寺)王之明の獄(刑事訴訟)を以て^{たてま}上つる。命じて再び往來の縦迹(経路)及び主使(首謀)の人を厳究せしむ。是れより先、太子の至るや、都人 皆な喜ぶ。以^{おも}爲らく上(福王弘光帝)の未だ子有らず、且に以て嗣と爲さんとす。是に至り人情 益々懼れ、民間 馬士英・王鐸を指して共に謀りて太子を戕害す、と流言す。黃得功 上疏して「[王之明]を」保留せんことを乞う。上(福王弘光帝) 命

じて之を獄中に養い、遂に刑を加えず。劉良左 上疏し、並びに太子・[自称妃の] 童氏の二事を言いて、「上（福王弘光帝）は羣臣の欺く所と爲る」と謂う。因りて法司に命じて二案の讞詞（判決文）を頒り、中外に傳示し、以て羣疑を釋かんとす。然れども流言日々甚だし（五十六卷本『南疆逸史』卷一・紀略第一・安宗：中華書局一九五九年出版活字本・九頁）。

『南疆逸史』によると、偽太子の取り調べの経緯は、

- | | |
|-------|--|
| 三月一日 | 宦官を派遣して詳しく観察させる。 |
| 三月二日 | 主要な官僚を集めて取り調べさせる。北來の太子は、「王之明」であると自白する。 |
| 三月九日 | すべての官僚を立ち合わせて取り調べする。 |
| 三月十五日 | 立ち寄り先や首謀者を取り調べさる。 |

となる。自白を得た段階で取り調べを終了せず、さらにすべての官僚を集めてその立会いのもとで取り調べを行ない、つづけて背後関係を調べているのである。福王政権が慎重に取り調べを行なったと考えられる。これが、福王政権の偽太子事件に対する対応であった。ところが、藩鎮や福王政権中枢部と対立した人たちは、それに納得せず、デマがひろがって行ったようである。

さて、福王政権下で南京工科都給事中（崇禎十七年六月七日の時点：『國榷』卷一百二・思宗崇禎十七年・「六月癸亥（七日）」条・六一一三頁による）であり、こうした状況を実見していた李清（字は心水、号は映碧、晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）は、偽太子について、南京の官僚たちは「ニセモノ」だと認識していたものの、民間では、「ホンモノ」だと信じられていたと伝えている。

偽太子の「王之明」屢しば訊（審問）され、百官 皆な偽なるを知る。然れども民間猶お嘖嘖（議論紛紛）として真なりとするがごときなり（『三垣筆記』附識下・弘光）。李清は、「百官 皆な偽なるを知る」という立場から、しばしば行われた取り調べについて、できるだけ事実関係のみを伝えようとしている。

李清がこのように述べるのは、李清と当時の記録を残した東林派に連なる人たちが、すこし経歴を異にしていることによる。

李慈銘（原名は模、字は式侯・悉伯。浙江會稽の人。道光九年十二月二十六日（西暦一八三〇年一月二十日）～光緒二十年（一八九四）。光緒六年庚辰科（一八八〇）二甲八十五名の進士）が、述べるように、李清は『南渡錄』をおいて、東林派の主張を主としているけれども、必ずしも全面的にしたがっているわけではない。それは、李清の祖父の李思誠（字は次

卿・碧海、号は眞懶齋。揚州興化の人。萬曆二十六年戊戌科（一五九八）二甲十七名の進士）は、魏忠賢の閹黨と関わりがあったからであるという。

映碧（李清）東林を主とすると雖も、而れども門戸に傍^{よりそ}わず。〔なぜならば〕其の祖の〔李〕思誠は、亦た禮部尚書を以て名を逆案に麗^{つる}なり、〔官僚の勤務評価における処分の第一等の等級の〕不^ふ謹^{まじめ}の例（免職処分）に照らして閑住す……（『越縕堂讀書記』同治丁卯（一八六七年）八月二十四日・「南渡錄 明李清撰」条）。

また、蕭穆（字は敬孚・敬甫・敬父。浙江桐城の人。道光十五年〔一八二三〕光緒三十年〔一九〇四〕）は、繆荃孫（字は炎之、一の字は筱珊、号は藝風。江蘇江陰の人。道光二十四年（一八四四）～民國八年（一九一九）。光緒二年丙子恩科（一八七六）二甲一百二十五名の進士）の発言として、李清の発言は、魏忠賢の閹黨に連なる人たちを回護しているという。

〔蕭穆が繆荃孫と『明史』稿本について話し合った時、繆荃孫が〕蓋し……（李〔清〕の交わる所は多く明季の魏黨の一流人物なり。李〔清〕は閹黨の李思誠^{ママ}の子（孫）なり。言う所は多く閹〔黨〕を回護す……（『敬孚類藁』卷九・「記永樂大典附記王萬二家明史稿」条）。このとおり李清の『南渡錄』や『三垣筆記』には、閹黨に連なる福王政権中枢部の人たちへの悪意のこもったコメントはあまり見られない。

また、以下で検討するが、様々な資料に断片的に引用される福王政権の発行した邸報と『南渡錄』における引用とがほぼ同じであることから、楊鳳苞（字は傳九、号は秋室・莢汧・小玲瓏山樵・西園老人。浙江歸安の人。乾隆二十二年（一七五七）～嘉慶二十一年（一八一六）。諸生）が「小朝（福王政権）の詔諭章奏 皆な其の手親より簡料（選擇）する者なり」（『秋室集』卷一・文・「南渡錄跋」条・十九葉）と言うように、李清は福王政権が発行した邸報などを参考にして『南渡錄』を撰したのではないか。そのため、『南渡錄』は、福王政権の公式発表に基づいて、福王政権の主張する事実関係を記している、と私は考える。

そこで、続いて『南渡錄』を検討して、福王政権が、偽太子にどのように対処したのか見てみたい。

『南渡錄』は、北來の太子について、三月四日の取り調べから記している。ただその前に、北來の太子の現れた状況をつぎのように伝える。

是れ（三月四日）より先、去年の十二月の間に鴻臚少卿の高夢箕^{ママ}の僕の木（穆）虎 北より南する有り。中途に一稚子に遇う。挾（と）もないて與^{とも}偕にす。薄暮（夕方）、內衣を解くに燦然たる龍なり。〔穆〕虎 驚きて詢^とうに、謬^{あざむ}きて「我は王子なり」と云う。既にして益々^{した}狎しめば、乃ち語を「太子」に易う。行きて京師（南京）に抵り孝陵（太祖洪武帝の陵墓）を望めば輒ち地に伏して哭す。〔高〕夢箕 初めは猶お疑い、留めて與に深語（深く話し込む）す。毎に言いて先帝・先后に及べば、則ち長く號（泣き叫ぶ）す。又た「閹賊 宮に入り、何を以て爾を呼ぶや」と問えば、稚子 涕泪交々下り、故より羞恨（羞じ怨む）の状を作して曰く、「兒我（我が子となりし者）」と。間の娓娓（美しく盛ん）たる

宮中の事は、[高]夢箕 以て辨ずる無きなり。乃ち始めて之を信ず。初めは疏もて聞せんと欲す。繼ぎて謂う此れ乃ち先帝の胤(ちすじ)なり、出れば恐らくは[禍から]免れず、と。密かに杭州の宅内に送る。稚子 至り、益々驕なり、毎に醉飲して則ち狂呼し、間々大言して闊歩す。[高]夢箕の侄 禁ずる能わざるなり。懼れ、書もて[高]夢箕に達す。[高]夢箕 亦た懼れ、命じて金華の浦江に載送す。然れども外人 已に嘖嘖たり。已むを得ず、正月に於いて疏もて聞す。上(福王弘光帝) 亟やかに内臣の馮進朝をして追回せしめ、紹興に至り方に及ぶ(『南渡錄』卷之六・「弘光元年(順治二年)三月丁亥(四日)」条)。

三月四日の取り調べの以前のことであるが、昨年の十二月に鴻臚少卿の高夢箕の使用人の木(穆)虎が北から南に逃れてきた。途中でひとりの子供に出会った。一緒に引き連れて行った。夕方、下ばきを脱がせようとする、燦然とした龍が施されていた。木(穆)虎が驚いて問いたですと、偽って「私は王族である」と答える。そうこうしてますます親しくなると、「王族」を「太子」にかえるようになった。南京に到着し太祖洪武帝の陵墓をのぞみ見ると、地に伏して悲しみ泣いた。太子を連れてきた木(穆)虎の主人である高夢箕は、最初は疑っていたものの、留めて深く語り合った。崇禎帝やその皇后に言及すると、ながく泣いた。さらに、「闖賊が宮中に入り、どのように爾を呼んだのか」と質問すると、子供は激しく泣いて、恥じ悔やむような様子で「兄我(我が子となりし者)」という。その間の生き生きした宮中のことについては、高夢箕は判断できなかった。そうしてはじめて信用した。最初はこのことを緊要なこととして上書して報告して知らせようとしたが、つづいてこれは先帝(崇禎帝)の胤(ちすじ)である。もしも出頭すれば禍を免れることはできないだろう、と考えた。そこでひそかに杭州の邸宅に送った。子供は到着すると、いよいよ驕慢になり、酔っぱらうたびに、大声でさげんだ。また、時々は大声をあげて闊歩した。高夢箕の甥は止めることができなかった。そのため、恐れて手紙で高夢箕に知らせた。高夢箕も怖くなって、浙江金華の浦江に送った。しかし、人々がさかんに言い合いようになり、仕方なしに、正月に上書して報告して知らせた。福王弘光帝は、宦官の馮進朝を派遣して追いかけさせ、浙江紹興でようやくたどり着いた、という。

なお、高夢箕については、『國權』(卷一百四・「弘光元年三月甲申朔日」条・六一九〇頁)や『明季甲乙彙編』(卷之三・「弘光元年三月甲申朔」条)・『明季甲乙兩年事蹟彙略』(卷之三・「弘光元年三月甲申朔」条)では、宦官の高起潛の「一族」とし、『明季南略』(卷之三・「太子一案」条)では「姪(甥)」とする。さらにいうと、この北來太子案で高夢箕は監獄に繋がれる。そして、福王政權の崩壊直後の混乱した時に、この北來太子は、極めてわずかな期間であるが民衆に担ぎ出されて即位する。即位した北來太子は、高夢箕と王鐸の釈放を命じ、禮部右侍郎兼東閣大學士に任命するが、出獄すると逃げ出したという。

[北來太子は]高夢箕を刑部の獄より釋し、禮部右侍郎兼東閣大學士に陞す。……[ところが]出獄して即ち逃ぐ(『甲乙事案』卷下)。

そして、三月四日に取り調べが行われる。ただし、前日には、宦官の李承芳・盧九徳を派遣して、予備的な審査を行っている。

〔弘光元年（順治二年）三月丁亥（四日）、上（福王弘光帝）は〕勛臣の朱國弼等と大學士の馬士英等と翰林の劉正宗等を召して武英殿に入り見しめ、面諭して、府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道とをして北來の太子の真偽を辨驗せしむ（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月丁亥（四日）」条）。

弘光元年（順治二年）三月四日に、福王弘光帝は代々の功臣で爵位を受け継いだ朱國弼等と大學士の馬士英等と翰林の劉正宗（山東安丘の人。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲二十四名の進士）等を武英殿に召し出し、じきじきに指示を出して、府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道官に北來の太子の真偽を弁別させた、という。

こうして、つぎのような上諭を出す。

是に至り、奉^うけたる上諭に「朕（福王弘光帝） 念うに先帝の子なれば、即ち朕（福王弘光帝）の子なり。若し果たして係^これ真の東宮なれば、朕（福王弘光帝） 尚お子無く、即ち愛養を加えん。但し、昨、内臣の李承芳・盧九徳を遣りて前去（出向）して審視せしむに、「面貌 不對（合致しない）、語言 閃爍（はっきりしない）なり」と回奏（皇帝が一度裁可した案件について再び上奏する）す³⁾。卿等 府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道、舊日の東宮の講讀等の官を會同し、前去（出向）さして真偽を辨驗（弁別検証する）す可し、と。時に諸講官の劉正宗・李景濂等 皆な言う、「太子の眉 目より長し」と。而して北に使用する兵部侍郎の左懋第の密疏⁴⁾ 至りて亦た言う、「鹵（虜：清政權にたいする蔑称）中に一太子有り、真偽を知らず。之を西宮の袁妃に詢^とうに、妃『太子 虎牙（とがった門歯）有り、脚下に痣有り』と曰う」^①。是に至り之を驗^{ため}すに、一の合う無し。繼ぎて講讀するは何れの所なるかと問うに、則ち誤りて端敬殿を指して文華殿と爲す。講讀の先後を問うに、則ち誤りて先に讀むを以て先に講ずと爲す。講讀 既に完りて寫^かく所は何れの字なるかを問うに、則ち誤りて『孝經』を以て『詩〔經〕』の句と爲す。字は幾行を寫^かくかを問うに、則ち誤りて描摹する十の大字に自から小字を旁に書すを以て全寫すると爲す。又た當日の講讀は曾て問難すること數次なるに、尚お幾何を記憶するやと問うに、「記〔憶〕せず」と曰う。又た講案の上に何物あるかと問うに、「知らず」と曰う。〔このことについて〕は、〔劉〕正宗・〔李〕景濂と雖も、亦た識らざるなり。已にして、兵科左（南京兵部左侍郎）の戴英^{すす} 前みて、崇禎十六年に曾て吳昌時を廷鞠（朝廷で取り調べる）するを以て、皇太子を中左門に携え、〔その時〕、何れの事ありて何れの語あるかを問う、又た嘉定伯は何姓・何名なるかを問うに、亦た對^{こた}える能わず。時に衆 猶お言う無し。惟だ閣臣の〔王〕鐸 大言して曰く「假なり」と。遂に退（引き下がる）す。未だ幾ばくならずして、左都（南京都察院左都御史）の李沾 數人と階を升るに、〔北來太子は〕始めて地に跪きて憐れみを乞い、自から「王昺の孫の〔王〕之明なり、太子に非ず。木^{ママ}（穆）虎の教うる所と爲

す」と云う。手書して〔李〕沾に付す。遂に實に據りて奏す^②（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月丁亥（四日）」条）。

①注5の『劫灰錄（原題「珠江寓舫偶記」）』では、「左懋第」や「袁妃」が「或言」となっている。

②王鐸の「奸人假冒大干澍（法）紀」奏疏（順治十年（一六五三）王鐸刻本『擬山園選集』卷十一・奏疏四・十葉～十二葉）によれば、この尋問は、すべて王鐸の主導によって行われたよう

- ✓ 3) 『國榷』によれば、崇禎十年（一六三七）十月二十日に、王鐸は侍班に任命され、吳偉業（字は駿公、号は梅村。江蘇太倉の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙十年十二月二十四日（西暦：一六七二年一月二十三日）。崇禎四年辛未科（一六三一）一甲二名の進士）は直講讀に任命されている。なお、皇太子は、崇禎二年二月四日（西暦：一六二九年二月二十六日）生まれで、この時には八歳であった。

〔崇禎十年十月〕甲寅（二十日）、東宮の官屬を定む。太子少保禮部尚書の姜逢元と詹事の姚明恭と少詹事の王鐸と國子祭酒の屈可伸は侍班とす。禮部右侍郎の方逢年と右諭徳の項煜と翰林脩撰の劉理順と編脩の吳偉業・楊廷麟・林增志は、直講讀とす（『國榷』卷九十六・「崇禎十年（一六三七）十月甲寅（二十日）」条・五七九二頁）。

①孫承澤『山書』によれば、この人事は八月に決定したという。

〔崇禎十年〕八月、明歳二月の東宮の出閣を以て、預め侍班・講讀等官を定む。侍班は、禮部尚書の姜逢元と詹事の姚明恭と少詹の王鐸・屈可伸なり。講讀は、禮部侍郎の方逢年と諭徳の項煜と修撰の劉理順と編脩の吳偉業・楊廷麟・林增志なり。校書は、編脩の胡守恒・楊士聰なり（孫承澤『山書』卷十・「東宮講官」条）。

そして、吳偉業は、崇禎十三年（一六四〇）四月十四日に、南京國子司業となる。

〔崇禎十三年四月〕乙丑（十四日）、韓四維 國子司業と爲し、吳偉業 南京國子司業と爲す（『國榷』卷九十七・「崇禎十三年（一六四〇）四月乙丑（十四日）」条・五八六二頁）。

王鐸は、崇禎十三年（一六四〇）九月二十二日に、南京禮部尚書となる。

〔崇禎十三年九月〕庚子（二十二日）、王鐸 南京禮部尚書と爲る（『國榷』卷九十七・「崇禎十三年（一六四〇）九月庚子（二十二日）」条・五八七八頁）。

このことからすると、王鐸・吳偉業ともに、皇太子が八歳から十一歳の約三年間皇太子に仕えていた。ただし、孫承澤『山書』（卷十五・「東宮開講」条）・欽定『明史』（卷一百二十・列傳第八・諸王五・十四葉：乾隆四年（一七三九）刊）によれば、皇太子への講義は崇禎十五年（一六四二）正月に始まったという。

さて、王鐸は、偽太子の取り調べについての上奏文のなかで、皇太子の姿をつぎのように伝える。

……臣（王鐸） 舊の禮部尚書（姜逢元）と北京の端敬殿中に侍班すること三季なり……尚お記〔憶〕するに先帝（崇禎帝）の東宮は、大目にして方額（方形のおでこ）、高聲にして寬頤（ひろいあご）、厚背（厚みのある背中）にして首昂（頭をもたげる）、行歩 莊なり、立度 肅なり……（順治十年（一六五三）王鐸刻本『擬山園選集』卷十一・奏疏四・「奸人假冒大干澍（法）紀」・十葉）。

吳偉業も、皇太子について、つぎのようなことを伝えている。

……太子は性仁弱（仁愛懦弱）、年十歳にして冠禮を行なう、圭を執りて羣臣に見ゆ、進止（進退/立ち居振る舞い） 尺寸も失わず。既にして講學し、出でて端敬殿に居る。上（崇禎帝） 手書して講官は「先生」と稱し、餘官は官名を稱えしむ。諸臣 講章を進め、上（崇禎帝） 親から刪正を加う。太子 經籍に於いては宮中の誦習する所多し。書法 尤も工なり。凡に憑りて銀管（銀飾りのついた毛筆、もしくは白色の筆）を操ること飛ぶが若し。書 成り、〔その書き上げた書を〕導（先導）するに朱籐（紫藤）を以てし、一〔人〕の腰玉の大璫 隨後（後ろにびったり付き従う）し、左右 黃封（皇族用の封じ紙）を用いて之を捧げて、内閣に送りて點定（手直し）す。既に長じて、元旦の早朝より、未だ嘗て側にならずんばあらず。誅賞する所の處分有れば、之を引きて共に視る。教えるに羣臣の上つる所の書を以てす。其の意は人の營私（私利をはかる）もて解求を爲し、而して故に浮詞を用いて我を嘗すこと多ければ、欺く所と爲ること勿きがためなり……（嘉慶九年（一八〇四）照曠閣刊『綏寇紀略』補遺上・虞淵沉中・八葉）。

に記されている。

こうした状況になって、拝受した上諭（詔書）に「朕（福王弘光帝）の思うに、先帝（崇禎帝）の子供は、朕（福王弘光帝）の子供である。もしも本当の皇太子であれば、朕（福王弘光帝）に子供がいないことから、愛護養育を加えたい。ただし、昨日、内臣（宦官）の李承芳・盧九徳を出向させて調べさせたところ、『面貌が合致せず、言語もはっきりしない』との上奏があった。そこで、卿等は府（南京）の六部の大小の九卿科道官や、もとの東宮の講讀官等の官僚と一緒に立ち会わせて出向して弁別せよ」とあった。この時、講官であった劉正宗・李景濂（陝西洋縣の人。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲一百五十六名の進士）などは、そろって「太子の眉は、目より長かった」と述べる。そして、北京の清政権に使者となって行った兵部侍郎の左懋第（山東萊陽の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲二百四十五名の進士）の密疏が到着し、「清政権内にひとりの太子が勾留されていますが、真偽は確かではありません。そのため袁妃にたずねたところ『太子は尖った歯をお持ちで、足下に痣があります』と答えた、ということです」と伝えてきた。そこでそれを調べてみると、ひとつとして合致しなかった。続いて、講讀はどこで行われたのかと質問すると、誤って「端敬殿」を指して「文華殿である」と答えた。講讀の前後の次第を質問すると、最初に読んでいたのを誤って最初に講讀を行なったとした。講讀が終わって何を筆写するのかと質問すると、『孝經』であるのを誤って『詩經』の句であるとした。筆写は何行を書くのかと質問すると、臨写してある十個の大字に、自分で小字をかたわらに書くことを誤ってすべて書き写すとした。また、当時の講讀は質問が何度か行われることがあったが、そのいくつかを記憶しているかと質問すると、「記憶していない」という。また、講義用の机に何が置いてあったかと質問すると、「知らない」と答える。また、劉正宗・李景濂も見知っていなかった。そうして、兵科左（南京兵部左侍郎）の戴英が進み出て、崇禎十六年に吳昌時を朝廷で尋問したことがあり、皇太子を中左門に帯同したが、その時どのようなことがあり、どのような言葉があったのかと質問した。さらに、嘉定伯は、姓は何で、名は何かと質問した。それに対して、また答えることができなかった。この時、誰も何も言わなかった。ただ、閣臣の王鐸（河南孟津の人。天啓二年壬戌科（一六二二）三甲五十八名の進士）が

- ✓ 4) 乾隆四十六年（一七八一）左堯勳刻本『蘿石山房文鈔』に「恭復諭旨疏宏光元年」が収められており、北方における崇禎帝の太子たちの動向が報告されている。また、この疏文は『南渡錄』（卷之四・「崇禎十七年（順治元年）十二月己巳（十五日）」都督陳洪範使北歸」条）にも引用されている。ただし、その上奏文には、袁妃の発言に関する箇所は、見当たらない。また、『蘿石山房文鈔』を補足する意味で左堯勳の子の左彤九が乾隆五十八年（一七九三年）に刻した『左忠貞公剩藁』卷一に、「奏疏軼篇目錄」があり、その中に「北使密奏疏」が挙げられている。そして、

右奏疏一十九篇、家塾 已に存する藁無し。諸書に縷縷（絶え間なく）として援引ざるを觀る。副本猶お人間に在るに似たり（『左忠貞公剩藁』卷一・二十一葉）。

と述べている。

このことからすると、ここでの密疏は、『蘿石山房文鈔』所収の「恭復諭旨疏宏光元年」とは異なるものであろう。

大声で「ニセモノ」だと言った⁵⁾。そうして引き下がった。ほどなく左都(南京都察院左都御史)の李沾(江蘇華亭の人。崇禎元年戊辰科(一六二八)三甲一百三十三名の進士)が数人とともに階段をのぼったところ、自称太子は地面に跪いて憐れみを乞い、自分から「王昺の孫の王之明です。太子ではありません。高夢箕の僕人の木^マ(穆)虎に教えられたままに行いました」と述べた。そのことを自書して李沾に渡した。こうして、事実上依拠して奏上した、という。

なお、『啓禎記聞録』巻四に「[弘光元年(順治二年)]三月、偶たま邸報を閲むに、廣昌伯

- 5) 憑甦(字は再來、号は蒿庵。浙江臨海の人。明・天啓七年(一六二七)～清・康熙三十一年(一六九二)。清・順治十五年戊戌科(一六五八)三甲十名の進士)の『劫灰録(原題「珠江寓舫偶記」)』(憑彦祥舊藏鈔本・綾装書局1995年影印出版)巻之四・附録・「偽太子王之明事」条は、ほぼ『南渡録』・『三垣筆記』などと同じであるが、官僚たちが馮可宗の私邸に訊問に行った時の様子がつけ加えられている。また、自白した時の様子も少し異なる。

是に于いて百寮 旨を承け、[北來の太子が移された]錦衣衛掌衛事都督同知の馮可宗の私寓(寓)に詣る。各々錦繡を服し、携えて朝服・吉服有り。辨驗(弁別檢証)して真なれば、即ち東宮を以て禮し、朝見し入りて上(福王弘光帝)を賀するに擬(するつもりである)す。先に傳え到る待罪の東宮講官の方拱□(一字空格:方拱乾)は、平頂(平らな)巾(頭を覆う布)、直領衣、大帶(玉帶)與に俱(完備)す。[馮]可宗の私寓は、堂屋三間あり。前除(階段) 宏敞(広くゆったりしている)にして、池に面するの左右の回廊は、各々隙地有り。一男子 小几(ちいさなテーブル)に凭りて南向に坐す。約十七八歳なり。百僚 參差として堂戸(門庭の内側)に入る。多く嘖嘖(議論紛紛)として私語す。或いは「皇太子虎牙(とがった門歯)二有り」と言う。或いは「眉 目より長し」と言う。今 是に非ざるなり。大學士の王鐸より東宮講官の[方]拱乾・[劉]正宗・[李]景簾に至るまで、近づき前み立つ。[王]鐸 [方]拱乾を指して「是れ誰なり」と問う。曰く「方先生なり」と。[方]拱乾 默然たり。[劉]正宗・[李]景簾を指して問うに識らざるなり。[劉]正宗 「講讀するは何れの所なり」と問う。曰く「文華殿なり」と。講讀の前後を問う。曰く「先ず購ず」と。書倣(書き写す)す字様(字句)を問う。曰く「^カ寫く所の字の『詩・經』の句は、之を忘る」と。字は幾行を^カ寫くかを問う。曰く「十の^{ツツ}攀ししもの(手本)ありて、[その手本のかたわらに]小字を^カ寫くよりす」と。講案の上に何物が有るかを問う。曰く「之を忘る」と。東宮の講讀は寔れ端敬殿に在り。先ず讀み、後に講ず。書倣(書き写す)は「孝經」を^カ寫く。案上に牙籤有り。[偽太子の返答は]全く尺に一の對(正しい)する所非ず。刑科左給事の戴英 前みて曰く、「先帝(崇禎帝) 吳昌時を廷鞠し、中左門(左中門)に于いて皇太子を携え出視するに、立つ所は何れの地なり。何れの事・何れの語有りや」と。曰く、「誰れが吳昌時なり」と。又た曰く、「之を忘る」と。嘉定伯の姓名を問うに、對^ツえる能わず。[戴]英 抗聲(大声を出す)して曰く、「汝は是れ詐冒なり。實を以て告げれば、當に汝を救うべし」と。[王]鐸 曰く、「假冒の子なり」と。即ち地に跪きて曰く、「公等の救命を求む」と。左都御史の李沾 授けるに紙筆を以て供稱(自白)さすに「高陽縣の人、王之明、駙馬都尉の王昺の姪孫なり。家破れ南奔し、高夢箕の家人の穆虎に遇い、教えらるるに皇太子と詐稱するを以てす」と。[李]沾 之を受け、即日百寮 四奏す。上(福王弘光帝) 召し入れて曰く、朕(福王弘光帝) [以下のように] 念う。先帝の身ずから社稷に殉ずれば、宮(『劫灰録(原題「珠江寓舫偶記」)』は空格:『南渡録』巻之六・「弘光元年(順治二年)三月丁亥(四日)」条に引用される同文の上論によって補う)中に側耳(耳をそばだてる)して、卿等の奏の至るを[待ち]望む。果たして見るに真なれば、即ち大内に迎え入れ、仍お皇太子と為さん、と。拱手(なすすべがなく、腕組みをする)し、上(福王弘光帝) 顧みず。[李]沾 三たび奏す。上(福王弘光帝) 徐むろに取り視て法司に付するを命ず。是の日、[高]夢箕 疏を具(作成)して稱するに、妖奸 已に露わる、と。[劉]正宗・[戴]英 各々疏もて主使(首謀者)を究めんことを請う(劫灰録(原題「珠江寓舫偶記」)』(憑彦祥舊藏鈔本・綾装書局1995年影印出版)巻之四・附録・「偽太子王之明事」条)。

①方拱乾は、北京で李自成政権に投降したために「應徒擬贖」処分を受け、蘇州にいた。

の劉□（一字空白。劉良佐のこと）の掲（上奏文の写し）を見る」として、藩鎮の劉良佐の上奏文を引き写している。その上奏文にまた、福王政権が発行した邸報が引用されている。それには、福王弘光帝の上諭（詔書）があり、つぎのようにいう。

……先帝（崇禎帝）の太子に至れば、[童氏の案件よりも]更に兩朝（崇禎帝と福王弘光帝）の倫敍（順序）に係る。爵（廣昌伯の劉良佐）正に疑慮す。[そうしたところ]忽ち邸報に接す。[その邸報には]、「三月初三日、上（福王弘光帝）保國公の朱國弼等を召して武英殿に到らせ面諭して曰く、「正月の内に一稚児有り。先ず鴻臚少卿の高夢箕の家に到り、『係れ先帝（崇禎帝）の太子なり』と説う。[高]夢箕 留むるも背て[自宅には]住（逗留）させず。[そうしたところ]、蘇・杭に往き去る、と[いうことを][高]夢箕 密奏す。朕（福王弘光帝）心に甚だ喜び、他（現れた自称太子）の所を失うことを恐れ、即ち内臣の憑進朝を遣りて前去（出向く）し、他（現れた自称太子）を趕（追いかける）せしむ。紹興に回到し、方纔趕上（追いつく）す。朕（福王弘光帝）念うに先帝（崇禎帝）の子なれば、朕（福王弘光帝）の子なり。若し固より眞の東宮なれば、朕（福王弘光帝）尙お子無く、即ち他（現れた自称太子）を愛養撫恤せん。但だ昨（きのう）内官の李承芳・盧九徳を宿（あらかじ）め差わして視せしむるに、「面貌 不對（合致しない）、語言 閃爍（はっきりしない）なり」と回奏（皇帝が一度裁可した案件について再び上奏する）す。[このことは]宗社に關係すれば、慎重ならざる可からず。卿等 府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道と舊日の東宮の講官を會同し、前去（出向）して眞偽を辨驗（弁別）し、即日（当日）の申時（午後三時から五時）に回奏（皇帝が一度裁可した案件について再び上奏する）せよ、此れを欽しめ」とあり（『啓禎記聞録』卷四・一葉）。

崇禎帝の太子の問題は、偽妃童氏の案件よりも、崇禎帝と福王弘光帝との順序にかかわってきます。爵（廣昌伯の劉良佐）は、ほんとうに懸念しております。そうしたところ、邸報に接しました。そこには、「福王弘光帝が、保國公の朱國弼などを武英殿に召し出して、詔書を出され「一月のころ、少年がおり、まず鴻臚少卿の高夢箕の家に行き、『先帝（崇禎帝）の太子である』と述べた。高夢箕は留めたけれども自宅には逗留させなかった。そうしたところ、蘇州・杭州に行ってしまった」ということを高夢箕が密かに報告してきた。朕（福王弘光帝）は心から喜んで、現れた自称太子が行方不明になることを心配し、宦官の憑進朝を出向かせ追いかけさせ、浙江紹興でやっと追いついた。先帝（崇禎帝）の子であれば、朕（福王弘光帝）の子供である。もしも本当の皇太子であれば、朕（福王弘光帝）に子供がいけないことから、愛護養育を加えたいと思っている。ただし、昨日、内臣（宦官）の李承芳・盧九徳を出向させて、予め調べさせたところ、『面貌が合致せず、言語もはっきりしない』との上奏があった。このことは、政権の根本に関係するので、慎重にならざるをえない。皆は、府（南京）の〔六〕部の大小の九卿科道官や以前の皇太子の教育係りと一緒になって、出向して眞偽を弁別して、当日の申時（午後三時から五時）にふたたび奏上するように」という福王弘光帝の詔が掲載されてい

た、というのである。

この邸報にある詔書と『南渡録』に引用される上諭（詔書）と、そして王鐸の「奸人假冒大干法（法）紀」奏疏（順治十年（一六五三）王鐸刻本『擬山園選集』卷十一・奏疏四・十葉）に引用される上諭と同じ内容である。

さて、北來の太子にホンモノの可能性を認めていた黄宗羲であるが、『弘光實錄鈔』に王之明の尋問調書を引用して、つぎのように述べる。

是に於いて刑部尚書の高倬・錦衣衛の馮可宗 皆な爰書（尋問調書）^{たてま}を上つりて云う、「王之明の供稱（尋問調書）を審得するに、『年十八歳、三月十六日生、保定高陽縣の人。伯祖は王昺、延慶公主を尙^{めと}る。祖は王晟、父は王元純、嫡母は劉氏、生母は徐氏なり。父母皆な故（亡くなる）し、止だ一妹有りて、舉人の張廷録の子の〔張〕問成に嫁與す。齊駙馬（駙馬都尉の齊贊元）の叔行四なる者〔清政権への使者の〕陳洪範と南より北す、故に〔王〕之明の屋（家屋）に住（宿泊）す、語ぐるに南方の樂土を以てす。〔そこで、王〕之明 驢一頭を買い、一僕王元を隨えて出走す。行きて山東に至り、王元 逃失し、穆虎及び長班の張應達・生員の劉承裕に邂逅し、遂に結伴（連れとなって）同行す。穆虎・張應達 〔王〕之明を脅し皇太子を冒稱さす。南京に至り、〔高〕夢箕の家に留まること四日、隨いて湯溪（浙江湯溪縣）に送られ潛住す』と。又た供（自白）して『武公の名下の一小内豎 〔王〕之明に教うるに皇后は是れ周、東宮は是れ田、西宮は是れ袁なり。又た一單（表）の細かに歴代の祖宗・各省の藩府を注するを與えて、〔王〕之明をして牢記（しっかりと記憶）せしむ』と。又た「方講官（方拱乾） 汝は何の故に之を識るや」と訊ねるに、〔王〕之明 供（自白）して『人有りて我に語ぐるに髯多くして方冠する者は、方拱乾なり』と。臣等 會し王之明は即ち漢史（『漢書』雋不疑傳）の言う所の「夏陽の男子（「成方遂」、一に「張延年」という）の〔武帝の〕衛太子を假冒する」の故智なるを看得す」と。又た傳えて各省の提塘官（在京の連絡係役の武官）・應天（南京）の士民 共に入りて審視せしむ。〔そして〕即ち審詞を以て刊刻し天下に頒行せしむ。然れども天下の人 愈々疑わざるは無し。即ち閭巷の小民も亦た泣き下り王鐸・方拱乾の肉を生食せんと欲するに至る（『弘光實錄鈔』卷四・「〔弘光元年（順治二年）三月〕丙申（四日）、會審太子真偽」条）。

①『明史』に「〔穆宗隆慶帝の公主の〕延慶公主、萬曆十五年下嫁王昺。昺嘗救御史劉光復、觸帝怒、削職。光宗立、復官（〔穆宗隆慶帝の公主の〕延慶公主、萬曆十五年王昺に下嫁す。〔王〕昺嘗て御史の劉光復を救い、帝（神宗萬曆帝）の怒りに觸れ、職を削る。光宗（泰昌帝）立ち、官に復す）」（『明史』卷一百二十一・列傳第九・公主・「穆宗六女」条）。

ここに刑部尚書の高倬（四川忠州の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲一百二十六名の進士）・錦衣衛の馮可宗が北來太子についての尋問調書を提出した。それには「自称太子の王之明の尋問調書を審査しましたところ、年齢は十八歳、保定高陽縣の人。伯祖は、穆宗隆慶帝の公主の延慶公主を尙^{めと}った王昺であり、祖父は王晟、父は王元純、嫡母は劉氏、生母は徐氏です。父母

ともに亡くなり、ひとりの妹がおり、舉人の張廷録の子の張問成に嫁いでおります。齊駙馬（駙馬都尉の齊贊元）の叔父の排行の四番目にあたる者が、陳洪範と同じく清政權への使者として南から北に行き、王之明の家に宿泊した。その時に南方はすばらしいところであると話した。そこで、王之明は驢馬一頭を購入し、従者の王元をしたがえて出発した。山東に着くと、従者の王元は逃げ出してしまった。そして、穆虎及び長班（召使）の張應達・生員の劉承裕と出会い、連れとなって行った。穆虎・張應達は、王之明に皇太子を騙らせた。南京に到着し、高夢箕の家に四日間滞在した。つづいて湯溪（浙江湯溪縣）に送られて身をひそめていた」という。さらに、尋問調書には「武公（孫臨（字は克咸、号は武公・武功・大略齋・肄雅堂。浙江桐城の人）のことか）に仕えている若い雑用係りが、王之明に皇后は周氏で、東宮は田氏、西宮は袁氏であると教えた。さらに、細かく歴代の皇帝や各省の王族が注記してある表を手渡して、しっかりと記憶させた」ともあります。また、方拱乾を指し示すことができたのは、どうしてなのかと尋ねると、王之明は「髯が多くて、方冠をかぶっているのが方拱乾であると人が教えてくれた」と自白いたしました。私たち臣下は、これは『漢書』雋不疑傳にある夏陽の男子である「成方遂」（一に「張延年」という）が武帝の衛太子だと偽称した故事と同じであると見てとりました」とあった。さらに、各省への連絡係役の在京の武官や南京の士民たちにもいっしょに取り調べさせた。そして、調書を刊行して内外に配布した。しかしながら、人々はますます疑いを抱いた。ちまたの人々でさえ嘆いて、北來の太子をニセモノと断定した王鐸・方拱乾の肉を食べてやりたいと願うようになった、という。

これは、福王政權が公示した調書の一部分を記録したと思われる。ただし、それでは人々は納得しなかったというコメントを黃宗義は付け加えている。

さて、取り調べが行われた午後に、報告を聞いた福王弘光帝は、落胆する。そして、再審査を命ずる。そして、南京兵部左侍郎の戴英（直隸宜興の人。崇禎七年甲戌科（一六三四）二甲四十七名の進士）が、すぐには処分せず、背後にいるであろう黒幕をはっきりさせるように提案し、そのことを取り調べるように指示が出される。

上（福王弘光帝） 群臣を召對す

即ち會審（會同で審理する）の午後なり。上（福王弘光帝） 曰く、「朕（福王弘光帝）先帝の身ずから社稷に殉ずるを念う」と。言出だして泪落つ。連けて拭き、語を成さず。繼ぎて乃ち曰く、「朕（福王弘光帝） 尚お子無し、今日 宮中に側耳（耳をそばだてて）し、惟だ卿等の奏の至るを〔待ち〕望む。若し果して真なれば、即ち大内に迎入し、仍お皇太子と爲さんとす。誰か知らん又た不是（間違い）なるを」と。慨傷（感慨して悲傷する）すること之を久しくす。時に左都（南京都察院左都御史）の李沾 偽太子の手書を持して跪きて奏する者 再びするも、上（福王弘光帝） 皆な顧みず。言 已み、徐むろに取り視るを命じ、法司に付して再び審（調べた）せしむ。兵科左（南京兵部左侍郎）の戴英 疏して言うに「王之明 係れ狡猾なりと雖も、然れども年力 尚お

釋^{おさな}し、必ず大奸の尤(最も悪劣)なるの挟みて奇貨と爲す有らん。[それを明らかにして]、將に群疑を開かんとす。凡そ宗藩(宗室諸藩)の内地に錯居(雑居)し、督鎮(四鎮の総括者:史可法)の外藩(外部の屏藩)に分閫(出向)し、喜びて道を樂しむを談ぜざるは莫し。別に一種の鋼廢されし簪紳(郷紳)・横議(勝手な議論をする)する處士^①(在野の士人)有りて、專意に造言し、風あらざるに且に波だたさんとす。況んや業^すに假なる者の在る有れば、則ち更に文もて[粉飾を]致すに難からず。竊かに謂う、此の獄は宜しく稍や時日を需^まち、天下をして共に假と爲さしむべし。速やかに結し、頃刻(たちまち)天下をして妄りに真と爲すと意^{おも}わしむこと母れ。即ち已に法司に付せば、而して一切提防(気を付ける)し、尤も宜しく慎密(慎重で内密にする)にすべし。蓋し[王]之明の來るは、必ず群奸の之を護る有り。計るに此の時に必ず輦轂(京城)に潜伏し、暗中に探聽す。計の行なわれざるを知れば、又た何ぞ一の[王]之明を顧み、尋^{すぐ}に滅口の計をせざらんや。乞う法司に勅し命じて、之を嚴にして又た嚴にし、主使(首謀)の人、務めて根究(徹底追究)するに在りて必ず得るが若くすれば、乃ち薄海(内外)に昭示す可きことを」と。疏奏ありて、法司に命じて依りて審(調べた)だす)せしむ(『南渡錄』卷之六・「弘光元年(順治二年)三月丁亥(四日)」条)。

①『孟子』滕文公下に「聖王不作、諸侯放恣、處士横議(聖王^{おこ}作らず、諸侯放恣にして、處士(在野の者)横議す)」。

合同査問が行われた日の午後になると、福王弘光帝は「先帝(崇禎帝)が身ずから社稷に殉ぜられたことを思うと」というお言葉があり、涙を流され、ぬぐい続けて言葉にならなかった。続いて、「朕(福王弘光帝)には、やはり子供がいない。今日は、宮中で耳をそばだてて、卿たちの上奏文の到着を待ち望んでいた。もしも、北來の太子が「ホンモノ」であれば、宮中に迎え入れ、やはり自分の子供としたかった。だれがそれを間違いであったと分かっていたであろうか」といい、長い間、感慨悲傷した。この時、南京都察院左都御史の李沾が自称太子の手書した尋問調書を持ってきて跪いて何度も奏上したものの、福王弘光帝は顧みようとなさなかった。発言が落ち着き、おもむろに取り寄せ読むように命じ、司法官に再度取り調べするようにさせた。南京兵部左侍郎の戴英が奏上して言うに「偽太子の王之明は、狡猾ではありますが、年齢や考え方がまだまだ幼くあります。必ず悪者のなかのさらなる悪者がいて、偽太子の王之明を用いて「奇貨」としようとしたことがあったのでしょう。そうした企てを明らかにして、様々な疑いを晴らしたいと存じます。すべての宗室や諸藩が内地に雑居し、督鎮(四鎮の総括者:史可法)が外藩に出向して、喜んで自分の信じる道を楽しんでいることを話しております。別に失脚した官僚・勝手な議論をする在野の者たちは、わざわざデマを飛ばし、風もないのに波を起こそうとしています。ましてやすでに「ニセモノ」が存在するのですから、でっちあげるのとは難しいことではありません。ひそかに申し上げますに、この事案はすこしばかり時間の立つのを待ち、世間に「ニセモノ」であると示すべきです。急いで結審して、たちまち世間に妄り

に「ホンモノ」であると思わせるようにすべきではありません。すでに司法に預けてすべてに気を付けて防ぎ、慎重で内密にすべきです。おそらく自称太子の王之明がやって来ることができたのは、必ず多くの悪人が保護していたからです。推し量ってみますにこの時期には、必ず都に潜入して、ひそかに探索しております。謀略のうまく行かないことを知ったならば、どうしてひとりの自称太子の王之明のことを顧みて、ただちに口封じの計略をしないことがありますでしょうか。司法当局に命令を下して、厳しいうえにさらに厳しくして、首謀者を徹底的に追及して、それを突きとめるようになさることを願いあげます。そうすれば、内外にはっきりと伝えられるようになります」と。戴英の奏上がなされて、司法に命じて審査させた、という。

二日後、杭州よりやってきた木（穆）虎を高夢箕に出会う前に捕らえて、調べたところ密書らしきものを所持していた。そして、三月九日に、鴻臚少卿の高夢箕を解任し、王之明・木（穆）虎などと一緒に、宮中に官僚を集合させて立ち合いの取り調べを行なうよう指示がでる。

〔弘光元年（順治二年）三月〕壬辰（九日）……鴻臚少卿の高夢箕の職を革め、王之明・木（穆）虎等と百官を集め廷訊するを命ず。

先三日の薄暮（夕暮れ）、旨（臣下の奏請をうけてくださる聖旨）を傳えて偽太子の一案を訊ね、次日を限りて奏せしむ。左都（南京都察院左都御史）の李沾 猶お例に循いて御史に委ぬ。是に於いて張孫振・何綸・夏繼虞の三御史 大理（大理寺：罪刑を評議する部門）の後堂（中央の部屋の後部）に登りて先ず鞠ぶ。〔しかし、これは〕禮に非ざるなり。時に〔木（穆）〕虎 新たに杭城より至る。未だ〔高〕夢箕に見ゆるに及ばざるに、猝に執えらる。〔張〕孫振 其の懷中を搜して、〔高〕夢箕の侄の〔高〕成の家書一封を得。内に「二月、三月、楚に往く、閩に往く」等の語有り。〔趙〕孫振 遂に挟みて奇貨と爲し、亟かに奏もて聞す。乃ち各官に命じて〔王〕之明等を庭（朝廷）に鞠べ、官民 俱に入りて視るを得しむ。甫め訊〔問〕するに、忽ち靖南侯の黃得功の提塘（在京の連絡係役の武官）前みて刊する所の一疏を出すに「先帝の子は即ち皇上（福王弘光帝）の子なり。若し即（速）やかに處治（處罰）すれば、東宮の諸臣 即ち〔真の太子だと〕認識（判断）するも、亦た敢えて出頭して禍を取らず」とする有り（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月壬辰（九日）」条）。

三日前の夕方に、臣下の奏請をうけて聖旨が出され、偽太子の案件について質問があり、次の日までに奏請するように命ぜられた。南京都察院左都御史の李沾は、慣例にしたがって御史にそれを委ねた。そこで張孫振（直隸霍山の人。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲三十三名の進士）・何綸（四川梁山の人。崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲七十三名の進士）・夏繼虞（江蘇溧陽縣の人（雲南武羅次縣の籍）。崇禎六年（一六三三）の舉人）の三御史は、司法を取り扱う大理寺の役所の後ろの正室に行き取り調べた。しかしこれは、正式のやり方ではなかった。この時、高夢箕の僕人の木（穆）虎が杭州からやってきた。高夢箕に出会う前に、いそいで拘束された。取り調べにあたった御史の張孫振は、木（穆）虎の懷中を探って、高夢箕の侄の高成の私信一

通を見つけた。そこには「二月、三月、楚に往く、閩に往く」等の語が書いてあった。御史の張孫振は、とうとうそれを持って「奇貨」として、奏上した。そこで各官に命じて朝廷で取り調べさせ、官僚や民衆にも入城させて傍聴できるようにした⁶⁾。訊問を始めると、すぐに靖南侯黃得功の提塘官（在京の連絡係役の武官）が進み出て、印刷された上奏文を出した。その上奏文には「先帝（崇禎帝）の子は、すなわち皇上（福王弘光帝）の子であります。もしも速やかに処罰を行なえば、太子に仕えていた臣下のものたちは、たとえ「ホンモノ」だと分かっている、言いだして禍を得ようとはしません」とあった、という。

同じ三月九日に、合同で行った王之明の取り調べの結果の公示と同時に、崇禎帝の三人の太子の諡號とをすみやかに公示するように禮部に指示があった。御史の成友謙（江蘇海門（江蘇通州）の人。崇禎七年甲戌科（一六三四）三甲一百二名の進士）の提案によったという。

禮部に命じて偽太子王之明の會審（合同審理）する一案を將^もって「公示するのに」同じくして東宮・二王の諡號と速やかに曉諭（告知）を頒（行き渡らせる）せしむ。御史の成友謙の言に従うなり（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月壬辰（九日）」条）。

そうして、三月十六日に、先帝（崇禎帝）・東宮（皇太子）・二王と熹宗天啓帝の皇后の諡號を定めた詔を公示するように指示がだされた。九日に出された命令にしたがったのである。

「弘光元年（順治二年）三月」己亥（十六日）……先帝・東宮・二王及び懿安皇后（熹宗天啓帝の皇后：魏忠賢・客氏に対立し、李自成が北京を攻略した時に自縊する）の諡の詔を天下に班（頒布）するを命ず（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月己亥（十六日）」条）。

同じ三月十六日にくりかえし王之明を取り調べるよう指示があった。

同日、王之明等を覆^{くりかえ}し訊〔問〕するを命ず。

時に三御史（張孫振・何綸・夏繼虞）大理寺の堂（法廷）に登り、聖旨を中に安（配置）す。三法司（刑部・都察院・大理寺）と錦衣衛は皆な側坐し、御史 少々坐するに後なり。[こうしたことは]此れより前に未だ有らざるなり。指揮するは皆な張孫振とに繇る。左都（南京都察院左都御史）の李沾は、堂官（長官）なりと雖も、之を如何ともする無し。[高]夢箕 到り、咸な甘言を以て[王]之明を誘い、嚴刑を以て木（穆）虎に加う。然れども明旨（天子の勅意）の云う所の「『二月・三月』は何の局を成さんとする所な

6) 憑甦の『劫灰錄（原題「珠江寓舫偶記」）』は、『南渡錄』の伝える内容とほぼ同じであるが、百官を集めて朝廷で取り調べた様子も伝えている。

壬辰（九日）、鴻臚寺少卿の高夢箕の職を革め、百寮を集め[王]之明・[高]夢箕・[穆]虎を廷に訊めるを命ず。凡そ在籍するの官と在京する舉人と在監・在學するの諸生と耆民 俱に入る。[王]之明 地上に坐す。京營の卒數十人 環坐して之を守る……（『劫灰錄（原題「珠江寓舫偶記」）』（憑彦祥舊藏鈔本・綾裝書局1995年影印出版）卷之四・附録・「偽太子王之明事」条）。

三月九日、鴻臚少卿の高夢箕を解任し、百官を集めて王之明・高夢箕・穆虎を朝廷で取り調べるよう命ぜられた。すべての在籍する官僚と、南京在住の舉人・在學する諸生と年長の人徳者が一緒にはいつてきた。王之明は、地面にすわり、宮城守護の兵士数十人が、取り囲んで警護していた、という。

り。『閩に往く・楚に往く』は何事を幹^なさんと欲す。并せて主使（首謀者）・附從（共犯者）實に煩（『三垣筆記』作「繁」）にして徒有らん」等語〔に対しては〕、皆な死に抵らんとするも供（自白）せざるなり。是れより先、[高]夢箕 曾て史可法の爲に硝黄（硝石と硫黄）を買いしことあり。此れに借りて[史]可法を阱^{おとし}れんと欲する者有り。是に至りて[高]夢箕 一の及ぶ所無し。惟だ口に[王]之明^{のし}を諛りて、天を仰ぎて嘆じて曰く、「我 無頼子の誤つ所と爲るのみ。然れども一念の痴忠は、天地 鑑みる可し」と。乃ち以て[高夢箕の甥の]高成等を捉（主犯と認定する）す。該衙門に命じて王之明を將^もつて意を加えて護養し、驟かに刑を加えず、海内の愚夫・愚婦に明告するを俟ち、然る後に正法せんことを請う（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月己亥（十六日）」条）。

この時、三人の御史の張孫振・何綸・夏繼虞は大理寺の法廷に入り、聖旨を中央に配置した。三法司（刑部・都察院・大理寺：重大案件は三法司が取り調べる。また、人を死刑に定めるには三法司の議を経ることが必要であった）と錦衣衛は、その傍らに着席し、御史はその少し後ろに着席した。こうしたことは以前にはなかったことである。取り仕切ったのは張孫振であり、左都（南京都察院左都御史）の李沾は、長官であったけれども、どうすることもできなかった。高夢箕が連行され、皆は甘言を弄して王之明に自白させようとし、木（穆）虎には厳しい刑罰を加えた。しかし、聖旨にある「『二月・三月』とは、その月にどのような状況を起こそうとしたのか。『閩に往く・楚に往く』とは、その地で何事をしようとしたのか。また首謀者・加担者は実際にうるさいほど仲間がいるのだろうか」などという質問については、とうとう自白しなかった。これより前に、高夢箕が史可法のために黒色火薬の原料となる硝石と硫黄を購入したことがあった。それにかこつけて史可法を罪に陥れようとする者がいた。この段階になっても、高夢箕は一切言及しなかった。ただ、高夢箕は自称太子の王之明を罵って、天を仰いで「私は、無頼の人間の誤るところとなった。しかしながら、抱きつづけている愚忠は、天地の見分けるところである」という。そこで、高夢箕の甥の高成等を主犯と認定した。こうして当該の部署に命じて、自称太子の王之明を特別に保護して、すぐに刑罰を加えないようにしたうえで、内外の人たちに告示して、処罰することを願い出た、という。

高夢箕は、あくまで冤罪を主張したので、甥の高成等を主犯として、自称太子の王之明に対してしばらく寛大な処置をとるように願い出たというのである。

その四日後の二十日になって再び王之明たちを取り調べた。

〔弘光元年（順治二年）三月癸卯（二十日）〕、三法司（刑部・都察院・大理寺：重大案件は三法司が取り調べる。また、人を死刑に定めるには三法司の議を経ることが必要であった）に命じて覆^{くりかえ}し王之明等を審す。

〔高夢箕の侄^{おく}の〕高成 已に杭郡より解られ至り、復た嚴刑もて言う所の「閩・楚」を鞫^{とりしら}べるに、含糊なるのみ。回奏（皇帝が一度裁可した案件について再び上奏すること）

すれば、再び訊（尋問）するを命ぜらる。[高] 夢箕は惟だ死を請う。是の日、[高] 夢箕と[王] 之明 始めて刑せんとす。時に上（福王弘光帝） 諸々の[藩] 鎮の心疑するを恐れ、其の提塘官（在京の連絡係役の武官）の潘茂斌等に隨審するを命ず。又た舊の東宮伴讀太監の丘執中に往き認（見分けさせる）するを命ず。[王] 之明 [丘] 執中を見て、亦た識らず。是に于いて群疑 少々解く。然れども御史の張孫振等 猶お「閩・楚」語を持して甚だ堅し。獨り大理寺卿の葛寅亮 密かに言いて曰く、「公等 朝廷の兵眾（『三垣筆記』は「兵力」に作る）を度りて、能く左良玉・鄭芝龍の罪を^{はか}聲べ、其の死命を制せんや。若し其の供（自白）するや、含忍（容認）すれば則ち法無し、搜剔（搜尋）すれば則ち激變あるのみ」と。[張] 孫振等 始めて微や悟り、之を閣臣の[馬] 士英に言う。此れ自り復た究（追究）せず（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月癸卯（二十日）」条）。

三月十六日の取り調べで主犯とされた高成（高夢箕の甥）は、杭州より護送されてきて、厳しい刑罰を加えて、私信にあった「閩・楚」について取り調べられたが、あいまいであった。そのため、奏上したものの、ふたたび尋問するようにと命令があった。高夢箕は、ただ死ぬことを願うのみであった。この三月二十日に高夢箕と自称太子の王之明に始めて処罰が加えられようとした。時に、福王弘光帝は、藩鎮たちが疑いを抱くことを恐れ、藩鎮の提塘官（在京の連絡係役の武官）の潘茂斌などに取り調べを傍聴するように命じた。さらに、もとの東宮伴讀太監の丘執中を行かせて、自称太子の王之明に識別させた。自称太子の王之明は、丘執中を見て、分からなかった。こうして、様々な疑惑は、すこしばかり晴れた。しかし、御史の張孫振などは、「閩・楚」の言葉に固執した。大理寺卿の葛寅亮（浙江錢塘の人。萬曆二十九年辛丑科（一六〇一）二甲十九名の進士）がひそかに、「朝廷の持っている兵力を鑑みて、藩鎮の左良玉（「楚」を指す）・鄭芝龍（「閩」を指す）の罪を言い立てて、その死命を制せますか。もしも左良玉（「楚」を指す）や鄭芝龍（「閩」を指す）と関係があったと自白があるような場合、そのままにしておけば法というものがなくなりますし、ふたりの藩鎮に対して取り調べを強行したのならば、騒乱を引き起こすだけです」と告げた。張孫振などはようやくすこしばかり理解し、この顛末を馬士英に伝えた。ここから、また追究はされなくなった。

このように、左良玉（「楚」を指す）・鄭芝龍（「閩」を指す）との関係が疑われたものの、軍事力を有する二人を刺激するのはよくないとして、すべてを馬士英に報告し、共犯者についての追究はされなくなったという。

三月二十日には、兵部に命じて黃得功が印刷して配布した上奏文を黃得功の提塘官に廃棄させるようにさせた。そして、兵科左給事中の錢增（江蘇太倉の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲十二名の進士）の「王之明の処罰はゆっくりと、高夢箕の処罰はすみやかにし、早く結審し、取り調べに関する書類の印刷配布を行なってもらいたい」という提案は、すべて認められた。

兵部に命じて鎮臣の黃得功の提塘官に着して[黃] 得功の原疏を將って立ちどころに燬た

しめ、以て奸煽を絶つ。敢て前の偽言に仍る者有れば、兵部^{とら} 擒えて正法とす。

戸部侍郎の何楷（福建鎮海衛の人。天啓五年乙丑科（一六二五）二甲五十三名の進士）の言に従うなり。初め、王之明 偽太子なるを以て至り、[何] 楷 同じく驗す。時に阮大鍼等の軒輊（傲慢を極める）状を見て、密かに工科都（南京工科都給事中）の李清に語けて曰く、「若輩（これ等の人） 目に人主無し。太子 至れば、其れ懼れて少しく^{おさま} 戢らんか。[そうなれば] 猶お清流の幸いなり」と。是に至りて、[王] 之明の贋なるを實見し、方に[黃] 得功の刊する疏を燬つを請う。刑科都（兵科左給事中）の錢增 亦た言う「十惡の條（『明律』に「一曰謀反（くつがえしそむくこと）、二曰謀大逆、三曰^{ぼうはん} 謀叛（本国に背いて他国にしたがう）、四曰惡逆、五曰不道、六曰大不敬、七曰不孝、八曰不睦、九曰不義、十曰內亂」）は、無將（謀反：『公羊傳』莊公三十二年に「君親無將、將而誅焉（君親 將にせんとする無し、將にせんとすれば誅す）」より大なるは莫し。參聽（刑罰を決定する）の法 朝審（死刑判決）より慎むは莫し。初めて衛臣（錦衣衛掌衛事都督同知の馮可宗）の私寓に看驗（觀察して取り調べる）して則ち[王] 之明の詐冒（いつわって騙る）は已に^{あき} 炳らかなり。再び衛司の法堂に會審し則ち[高] 夢箕の勾導すること愈々彰らかなり。手書 現存すれば、百喙（言葉を尽くして弁明する）するも解（申し開き）し難し。今、聖諭を讀むに云う「朕（福王弘光帝） 先帝の身ずから社稷に殉ずるを痛念（痛みを氣にかけていたわる）す。血胤の猶お存すれば、當に天地祖宗の心を體し、意を加えて撫養すべし」と。仁なるかな聖心。若し果して係れ先帝（崇禎帝）の青宮（太子）なれば、一堂に相い見え、其の手を執りて頭を抱き、一言して泣數行下る者なれば、如何に宮府（宮廷と役所）を酸感（悲傷感動）するかを知らず。[なのに、高] 夢箕 遠く僻遠に送りて、存活（保全）の計を爲さんと欲す。是れ誠に何れの心ならんや。[そのため]、[「自称太子を遠方に避難させたという行為は」、明らかに朕（福王弘光帝）を視て殘忍寡恩の主と爲す」との斯の論 一たび出づ。[高] 夢箕 何れの地ありて以て自から容るる可けんや。律るに國法^{のつと}を以てし、刑（刑罰）を立つるに何れの辭あらん。乃ち皇上（福王弘光帝） 猶お^{おも} 以えらく一日の成案（定論）は、千秋の信史の確と爲すに如かず。文武の大小の諸臣の質審（訊問）は、海内外に^{いた} 薄るの愚夫愚婦の傳頌（傳揚稱頌される）して公と爲すに如かず。茲れ既に公なり、既に確なり。臣愚 謂えらく、[王] 之明は猶お須臾の死を貸（赦免）す可し、而して[高] 夢箕は斷じて一刻の生を^{ぬす} 偷み難し。今、試みに[高] 夢箕に再び^{といつめ} 詰るに、如し果して是れ東宮なれば、便ち當に朝廷に奏聞し、安頓撫養せしむべきなるに、如何ぞ僻遠の所在に送るを要せんや。跪きて天を^{とな} 誦うの言は、更に何れの處に於いて饒舌ならん。想うに惟だ點額（失意） 有るのみ。且つ[高] 夢箕の陰謀の敗れてより而一番の訊奏あれば、則ち一番の詔諭あり。石頑豕蠢と雖も、亦た當に^{しきり} 頻に慈愛なる聖諭^き を聆き、^{あたたか} 恍も醒むること有るべきが若し。況んや血氣心知（『禮記』三年間）の倫に在りて、能く感動する無け

んや。伏して冀うに勅もて法司に下し、期を刻りて定案（事件に対して結論を出す）し、盡く葛藤（紛糾する）を斬り、再び閣部（内閣）の諸臣に傳示（傳達告知）し、亟やか（すみやかに）に彙録を行ない、史館に宣付（皇帝の命令を交付する）し、仍お鏤板して成帙し、海内に頒布せよ、と。皆な之に従う（『南渡録』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月癸卯（二十日）」条）。

はじめ、王之明が太子と偽ってやってくると、何楷（福建鎮海衛の人。天啓五年乙丑科（一六二五）二甲五十三名の進士）は、取り調べに参加した。時に阮大鍼などが傲慢を極めていた状況を見て、こっそりと南京工科都給事中の李清に言うには「阮大鍼のような奴らは、人主すら無視している。太子が現れたならば、恐れてすこしはおとなしくなるのではないか、そうなれば、清流派にとって幸いである」といていた。ただここに至って、太子が「ニセモノ」であることを実際に知り、黃得功が偽太子のために書き上げ発行までさせた上奏文の廃棄を提案した。刑科都（兵科左給事中）の錢増もまた、『明律』でいう十惡の條では、無將（謀反）より悪いものはない。參聽（刑罰を決定する）の法で朝審（死刑判決）より慎重でなければならないものはない。はじめて衛臣（錦衣衛掌衛事都督同知の馮可宗）の私寓で調べてみて、王之明がニセモノであることは明らかであった。ふたたび衛司の法廷で取り調べてみると、高夢箕に操られていることがますます明らかになった。手書きの尋問調書が存在しているので、どんな人が言葉を尽くして弁明しても申し開きができない。いま聖諭を拝読するに『朕（福王弘光帝）は、先帝（崇禎帝）が社稷に殉ぜられたことを痛念（痛みを気にかけていたわる）している。血筋が残されているのであれば、天地やご先祖様の気持ちを体現して、よく気を付けて養育したい』とある。ほんとうに慈愛にみちたお心である。もしも、先帝（崇禎帝）の太子であれば、一堂で対面し、その手を取り、頭を抱き、一言あって涙を流せば、どれほど宮中を悲しみ痛み感動させるかわからない。なのに高夢箕は自称太子を遠方に送り、生かしておく手だてとした。これは、ほんとうにどうした心なのであろうか。そのため、「自称太子を遠方に避難させたという行為は、明らかに朕（福王弘光帝）を殘忍で寡恩（恩恵に欠ける）の君主とするものである」というこの論が出されることになった。高夢箕は、どこの地に自分の身を落ち着かせることができるのだろうか。國法にのっとり、刑罰を決めるのに何の辭（説明）がいるでしょうか。さらに、皇上（福王弘光帝）は、早急な結論は、千秋（長い年月にわたる）の「信史（『公羊傳』昭公十二年に「『春秋』之信史也）」の確實であることに及ばず、文武百官の直接の取り調べは、内外の人たちの伝え称賛することの公然さに及ばないとお考えになっておられる。こうしたことは、公然のことであり、確実なことである。そこで愚かな臣下である私は思いますに、自称太子の王之明はすぐの処刑を猶予されるべきですが、高夢箕は断じてすぐに処刑すべきです。いま試みに再び「もしも太子であったのなら、朝廷に奏上し、収容して養育させるようにすべきであったのに、どうして遠く離れた場所に送る必要があったのか。跪いて天（天地 鑑みる可し）を誦えるという発言は、さらにいったいどこでくどくどとしゃべり続けたのか（法廷で話し続け

たことをになじる)」と問いだしたい。思うにただ失意があるだけなのだろう。その上、高夢箕の陰謀が失敗してより、ひとつの取り調べについての上奏があれば、それに対してひとつの詔諭があった。石頭で無知蒙昧であっても、しきりに慈愛にあふれた聖諭を聞けば、あたかも目が覚めるようになるようであろう。ましてや血が通い心があるものにおいては、感動しないことはないであろう。そこで司法に勅をお下しになって、期日を区切って判決を出し、すべての雑音を断ち切り、ふたたび内閣の大臣たちに告知して、裁判記録を作成し、史館に交付して、印刷して冊子を作り、内外に頒布なさるよう伏して願い奉ります」と。すべて、それに従った、という。

三日後の二十三日に、偽妃童氏事件に関する資料とともに、略節（要約した報告書）を内外に告示するように命ぜられた。

〔弘光元年（順治二年）三月〕丙午（二十三日）……王之明・童氏の二案の審明の略節（要約した報告書）を以て中外に宣布するを命ず。

初め二事 紛紛たり。人皆な「上（福王弘光帝）の薄く、閣臣 内臣の逢迎（迎合）を爲す」と言う。是に至り劉良佐 復た之を言い、「太子は先帝の遺血なり。童氏は皇上（福王弘光帝）の宮闈（後宮）の係る所なり。謹しみて涕泣して保留せん」等語有り。旨に言う「朕の前后黄〔氏は〕早夭（若くして亡くなる）し、継妃の李〔氏は〕殉難す。〔ふたりは〕俱に^{すて}經に追諡（諡號を贈る）す。且つ朕（福王弘光帝）の先は郡王爲り。何ぞ東西の二宮有らん。先帝（崇禎帝）と朕（福王弘光帝）とに至りては、初めより嫌怨無し。豈に天下を利するの心^①有りて、其の血胤を害せんや。但だ太祖の天潢（後裔）・先帝（崇禎帝）の遺體（ちすじ）は、異姓の頑童を以て混亂す可からず。宮闈（後宮）は風化（教育感化）の關する所なり。豈に妖婦の闖入（みだりに入る）を^{ゆる}容さんや。因りて法司をして略節（要約した報告書）を以て播告させん」と。時に上（福王弘光帝）寛慈（思いやりと慈愛がある）なるも寡斷（決斷に欠ける）、内外の群小（小人）日々横〔行〕し、流言 民間に喧しきに致す。故に一たび太子至るを聞き皆な喜ぶ。而して二三の民望（人々の願望）は、言^①足（はっきりさせる）れば徵信（信用）さる。高弘圖・徐石麒・劉宗周の輩の如きは、又た朝に立つ無き者なり、故に愈々疑い、愈々辨じ、愈々辨じ、愈々疑う。上（福王弘光帝）已むを得ず、〔馬〕士英の留中の疏を發して、臣民に昭示す。蓋し初め太子至ると聞き、保全を議するの語^②なり。然れども亦た信ずる者無し（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月丙午（二十三日）」条）。

①『孟子』盡心上に「孟子曰……墨子兼愛。摩頂放踵，利天下爲之（墨子は兼愛す。頂きを^ま摩して踵に放るも、天下を利することは之を爲す）」。

②『左傳』襄公二十五年に「仲尼曰、『志』有之、言以足志、文以足言仲尼 曰く、『志』に之れ有り、言は以て志を足（はっきりさせる）し、文は以て言を足（はっきりさせる）す」。杜預注に「志、古書也。足、猶成也（志は、古の書なり。足は、猶お成なるがごときなり）」。

③馬士英の奏疏には、「如し其れ眞なるや、興寧宮の後の慈禧殿の旁に于いて之を居き、一切の典禮は、從容と再び議せん。但だ外封す可からず。奸人の心を啓けばなり。皇上（福王弘光帝）先帝の失守の後を續緒（受け継ぎ即位する）すれば、名正言順なり。何の疑慮（疑い顧慮する）すること有らん。若し此の事 果して眞なれば、則ち憤しみて之を防ぎ、奸謀 消釋（除き去る）すれば、國家の幸なり」などの発言があった。注7参照。

はじめ、自称太子の王之明と自称妃の童氏のふたつの事案は、紛々としていた。人々は、「皇上（福王弘光帝）が薄情なので、大臣がそれに迎合して二つの事案をあしらった」といった。ここにたって、劉良佐がこのことを言い立てて「太子は、先帝（崇禎帝）の血筋です。童氏は、皇上（福王弘光帝）の後宮にかかわるところです。謹んで涙を流して保護なさってください」などの発言があった。皇上（福王弘光帝）の旨には、「朕（福王弘光帝）の前の皇后の黄氏は、若くして亡くなり、つぎに妃となった李氏は反乱の犠牲となった。ふたりはすでに諡號が贈られている。さらに、朕（福王弘光帝）は即位する前は郡王であった。郡王の身分で、どうしてふたりの妃を持つことができるのか。先帝（崇禎帝）と朕（福王弘光帝）の間には、不満や恨みなどなかった。どうして天下の利益になるというような気持ちをもって、先帝（崇禎帝）の血筋に危害を加えるだろうか。ただ太祖洪武の後裔・先帝（崇禎帝）の忘れ形見は、異姓の児童に乱されるべきではない。また、後宮は教育感化にかかわるところである。どうして妖婦の乱入を許容できるだろうか。こうしたことから、司法に命令して要約した報告書を告示する」とあった。時に、上（福王弘光帝）は思いやりと慈愛があったものの、決断に欠け、内外の小人は日々横行し、流言が民間に喧しい状態になった。だから、ひとたび太子がやってきたと聞くと、皆は喜んだ。そして少しばかりの人々の願望は、言葉がはっきりすれば、すぐに信じられるものである。高弘圖・徐石騏・劉宗周などは、又た福王政権のもとでは官職に就かなかった者たちだったので、ますます疑い、ますます議論した。そして、ますます議論して、ますます疑ったのである。上（福王弘光帝）は、仕方なしに、上（福王弘光帝）の手元に留めていた馬士英の上奏文を取り出して、臣民に明らかに示した⁷⁾。それは、はじめて太子がやってきたと聞き、その保護を提案したものであった。しかし、この馬士英のこの上奏文を信用した者はいなかった、という。

三月二十五日になると、藩鎮の左良玉が、馬士英等を糾弾するためとして反乱を起こす。

〔弘光元年（順治二年）三月〕戊申（二十五日）、左良玉 兵を擧げて武昌に反す（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月戊申（二十五日）」条）。

四月四日、左良玉軍は、九江に着き、九江總督の袁繼咸に九江の開城を要求する。袁繼咸は、交渉のためしぶしぶ左良玉の舟で面会する。左良玉は、偽太子の下獄したことを申し立てておおきく悲しみ泣いた。その翌日の会談において、左良玉は袖から偽皇太子の「密諭」を出して、袁繼咸配下の將軍に同盟を強要する。袁繼咸は厳しい顔つきをして、「密諭はどこからもたらされてきたものなのか。先帝（崇禎帝）の舊徳は忘れるべきではないし、今上（福王弘

光帝)の新恩にはそむくべきではない」という。左良玉は怒った。そばにいた余有灝がひそかに袁繼咸の足を踏んだので、それ以上は言わなかった。そして、左良玉と賓主の禮を行なって別れ、九江を攻め落とさないことを取り決めた。ところが、左良玉の部下が九江城内に乱入し、殺戮や掠奪を行なった。そこで、袁繼咸は九江を出て、左良玉を面とむかって詰問した。この時、左良玉の病状は悪化しており、九江の炎を見て、おおきく悲しみ泣いて、「私(左良玉)は、袁公(袁繼咸)に負いてしまった」といい、數升の血吐いて、この夜に亡くなった。左良玉の軍は、このことを秘して喪を発することなく、左良玉の子の左夢庚を留後(跡継ぎ)に押し立てて、船団を東に移動させた、という。

[弘光元年(順治二年)四月丙辰(四日)]遂に監紀の余有灝^{とも}と共に[左]良玉に舟中に會す。[左]良玉 言いて太子の下獄の事に及び、大いに哭す。次日、……[左]良玉 袖より「皇太子密諭」を出し、諸將に盟するを^{せま}劫る。[袁]繼咸 色を正して曰く、「密諭は何れより來る。先帝(崇禎帝)の舊德 忘るる可からず、今上(福王弘光帝)の新恩も亦た負く可からず」と。[左]良玉 ^{いか} 恚る。[余]有灝 陰かに[袁]繼咸の足を躡めば、遂に復た言わず。[そして、左]良玉と賓主の禮を成し別れ、城を破(攻め落とす)らずを約す。……[ところが、左良玉の部下が九江城内に乱入し、殺戮や掠奪を行なった]……[そこで袁繼咸は]、城を出でて[左]良玉を面責す。[左]良玉の病 方に劇しく、城中の火光を望み、

- ✓ 7) 『國權』の「弘光元年三月甲申朔日」条に、この馬士英の上奏文が引用されている。それによると、つぎのようなものであった。

馬士英 先ず奏して曰く、既に東宮 虎口を脱し、間關(転々として)として南に至る。即ち明[朝]の宮に當(面會)すべきなるに、乃ち杭[州]に走り紹興に走り、紹興より東す。豈に海に沉まんと欲するか。疑う可きの一なり。東宮の睿質は凝重(莊重)、輕しく言語せずと聞く、而して此の人 機辨(機敏でよくしゃべる)なりて、[ホンモノの太子だと]方物す可からず(識別できない)、疑う可きの二なり。昨、左懋第の密抄 來り示すに、彼(清政權)の中に于いて亦た假太子を得。辨析すること甚だ詳し。以て示すに西宮袁妃及び諸々の宮人は皆な云う「太子 虎牙有り、足に痣有り」と。況んや皇女は周奎の家に見在するに、此に「害に遇う」と云う。疑う可きの三なり。[以上のことから]當に盧九德及び當日の東宮の内臣をして城外の僻處に于いて先帝・永定の二王庚申??及び宮制を以て詰問せしむべし。如し假冒なれば必ず能く悉くさず。且つ原の日講官の方拱乾等 蘇州に在り、容に密諭もて京(南京)に來らし之を辨ぜしむべし。偽なれば則ち當に法司に下し、臣民と共に見て之を棄つ(『孔子家語』刑政に「是故爵人必於朝、與眾共之也。刑人必於市、與眾棄之也(是の故に人に爵するには必ず朝に於いてす。眾と之を共にするなり。人を刑するには必ず市に於いてす、眾と之を棄つるなり)」。如し其れ眞なるや、興寧宮の後の慈禧殿の旁に于いて之を居き、一切の典禮は、從容と再び議せん。但だ外封す可からず。奸人の心を啓けはなり。皇上(福王弘光帝) 先帝の失守の後を繼緒(受け継ぎ即位する)すれば、名正しく言順なり。何の疑慮(疑い顧慮する)すること有らん。若し此の事 果して眞なれば、則ち愼しみて之を防ぎ、奸謀 消釋(除き去る)すれば、國家の幸なり」と(『國權』卷一百四・「弘光元年三月甲申朔日」条・六一九〇頁)。

ここで、馬士英は、「如し其れ眞なるや、興寧宮の後の慈禧殿の旁に于いて之を居き、一切の典禮は、從容と再び議せん」と述べており、北來の太子がホンモノであった場合には、まずは宮中で保護したいとしている。つまり、福王弘光帝の発言と軌を一にしているのである。もっとも、それに加えて「外封す可からず」とか、福王弘光帝の即位の正統性についての発言などは、いろいろな思惑から出ているようであるが。いずれにせよ、馬士英のこの密疏の内容からすると、馬士英が北來太子の抹殺を謀ったとは、考えにくい。

大いに哭して「予（左良玉）袁公（袁繼咸）に負けり」と曰い、血を嘔くこと數升にして、是の夜 死す。秘して喪を發せず。共に〔左〕良玉の子の〔左〕夢庚を推して留後と爲し、急ぎて舟を移して東す（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）四月庚申（二十五日）左良玉兵破九江，是夜死」条）。

『金陵野鈔』は、このことを節略してつぎのように記す。そして、四月四日に左良玉の叛乱のことが、南京に伝わったと付け加えている。

〔弘光元年（順治二年）四月〕丙辰（四日）、逆賊の左良玉 九江に至り、江楚（九江）總督の袁繼咸に其の舟に入ることを要め、皇太子の密諭を詐稱して與に盟せんとす。〔袁〕繼咸 従わず、歸りて城に入る。〔左〕良玉 兵を縱ち焚掠（放火掠奪）す。〔袁〕繼咸 復た〔左〕良玉を面責す。〔左〕良玉 大いに哭して「我 臨侯に負けり」と曰う。臨侯は、〔袁〕繼咸の字なり。既にして血を嘔くこと數升……是の夜 死す。秘して喪を發せず。南京は是の日に始めて〔左〕良玉の反するを聞く……（『金陵野鈔』一卷・「四月丙辰（四日）」条）。

また、『明季南略』卷之三・「又檄」条によれば、左良玉軍は、道々で「太子の密旨をうけて、救援に赴く」という告示を張ってまわった、という。

〔弘光元年（順治二年）四月〕初七日己未、左兵 東流に入る。〔左〕良玉 沿途（沿路、一路上）に遍ねく告示を張りて「本藩 奉けたる太子の密旨もて師を率いて救に赴く」と稱す（『明季南略』卷之三・「又檄」条：『明季遺聞』卷三・『明末紀事補遺』卷二も同じ）。

左良玉軍は、反乱の大義名分のひとつとして、偽太子から密勅をうけたとしていたようである。

この左良玉の反乱の知らせをうけて、四月六日に、九江總督の袁繼咸（江西宜春の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲一百三十二名の進士）に命じて「訊王之明實録」を内外に告示配布させた。

戊午（六日）……江督（九江總督）の袁繼咸に命じて「訊王之明實録」を内外に昭布せしむ。

初め〔袁〕繼咸 太子の一案を以て左良玉に疑われ、大疊を召くを恐れ、乃ち疏もて言うに「太子の真偽は、臣の能く懸揣（推量）するものに非ず。真なれば則ち〔左〕良玉の言を行なうことを望む。偽なれば則ち従容と審處（尋問）するを妨げず。多く東宮の舊臣を召して識認さし、以て中外の〔疑〕惑を解け」と。疏 未だ達せざるに、〔左〕良玉 已に反す。是に至り方に達す。故に即ち〔袁〕繼咸に命じて昭布さす。蓋し之を疑えはなり。時に督臣（湖廣巡撫）の何騰蛟も亦た〔袁〕繼咸と之を言う。然れども深く求むる者無し（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）四月戊午（六日）」条）。

はじめ、袁繼咸は偽太子の事案で左良玉に疑われ、大きな禍を招くことを恐れ、「太子の真偽は、私のような臣下の推察するものではありません。もとも「ホンモノ」であれば、左良玉の願い通りに取り計らい、「ニセモノ」であれば、慌てず騒がずに取り調べを行なって差支えがありません。多くの太子に仕えていたもとの官僚を召し出して識別させて、内外の疑惑を解くべき

です」という上奏文を書いた。ただし、上奏文はまだ提出しないうでいた。そして、三月二十五日（『南渡録』卷之六による）に左良玉が反乱を起こしてはじめて提出した。そこで、袁繼咸に命じて告示頒布させたのである。おそらく、福王政權内部では、袁繼咸が左良玉に加担するのではないかと疑っていたためであろう。この時、湖廣巡撫の何騰蛟（字は雲從。貴州黎平衛の人。天啓元年（一六二一）の舉人）も亦た袁繼咸と同じように述べた。しかし、その提案を深く行ってほしいと思うものはいなかった。

四月十三日には、刑部に命じて速やかに「王之明情辭」を発行させ、本当の太子などに奉った諡號についての詔を伝える役人を付けて、各郡に伝えさせた、という。

〔弘光元年（順治二年）四月〕乙丑（十三日）……刑部に命じて速やかに「王之明情辭」^①を刊し、諡詔を賚^{たま}う使臣（諡についての詔書を頒賜する使臣）を付して、逐郡に宣布す。

御史の張兆熊の言に従うなり（『南渡録』卷之六・「弘光元年（順治二年）四月乙丑（十三日）」条）。

①『國權』に「〔弘光元年（順治二年）四月乙丑（十三日）〕御史の張兆熊「王之明^①の事は、謗議沸騰たり。其の口詞・章奏を外に刊するを命ぜられんことを」と奏す（『國權』卷一百四・「弘光元年四月乙丑（十三日）」条・六二〇三頁）とあるので、四月六日に告示された「訊王之明實錄」と異なるものであろうか。

そして、四月十六日には、九江總督の袁繼咸が「左良玉の反乱軍は東に向かって行きました。偽太子の王之明の処罰を緩やかにして、その進軍を止めるよう願います」と密報してきた。それに対して、「王之明がほんとうに先帝（崇禎帝）の忘れ形見であるならば、朕（福王弘光帝）はどうして慈愛しないであろうか。臣下が反乱を起こして進軍してくることがあるのだろうか。袁繼咸は重臣であり、軍隊を擁している。三綱五常の大義は、どうして聞き知っていないのか。どうして、左良玉の反乱軍を阻止できないと言わないのか」と旨がくだされた、という。

〔弘光元年（順治二年）四月〕戊辰（十六日）、總督九江の袁繼咸 密報するに「左〔良玉〕の兵 東下す、太子〔の処罰〕^{ゆるや}を寛かにして以て之を遏止せんことを請う」と。旨有りて「王之明 果して先帝（崇禎帝）の遺體（忘れ形見）なれば、朕（福王弘光帝） 豈に慈愛すること無きや。〔それなのに〕人臣 何ぞ即ち稱兵（挙兵）して犯闕（挙兵して都に入る）するや。〔袁〕繼咸 身は大臣と爲り兼ねて兵眾（軍隊）を擁す。綱常大義は、豈に習聞せざらんや。如何ぞ堵截（阻止）する能わずと言わん」と（『國權』卷一百四・「弘光元年四月戊辰（十六日）条・六二〇四頁）

『明季南略』もほぼ同じ内容のことを記している。

〔弘光元年（順治二年）四月〕十六日戊辰、袁繼咸 奏するに「左良玉 兵を擧げて東下す。太子^{ゆふ}を赦し以て之を遏止せんことを請う」と。旨有りて「王之明なる^{もの}は係れ假冒なり。如果し先帝（崇禎帝）の遺體（忘れ形見）なれば、朕（福王弘光帝） 豈に慈愛すること無きや。〔それなのに〕人臣 何ぞ即ち稱兵（挙兵）して犯闕（擧兵して都に入る）するや。〔袁〕

繼咸 身は大臣と爲り兼ねて兵眾（軍隊）を擁す。如何ぞ堵止（阻止）する能わずと説か
んや」と（〔弘光元年（順治二年）四月〕『明季南略』卷之三・「太子一案」条）。

『南渡録』では、袁繼咸の奏上については記載されているが、自称太子の「王之明」を赦し
て左良玉の叛乱をとどめるべきだということは記されていない。

〔弘光元年（順治二年）四月〕戊辰（十六日）、詔もて江楚總督の袁繼咸を責む。

時に、〔袁〕繼咸 疏もて「左良玉 稱兵（挙兵）し、堵止（阻止）し得ず」と言う。故
に責むるに「身は大臣と爲り、兼ねて兵眾（軍隊）を擁す。何ぞ得ずと云うや」を以てす
るなり（『南渡録』卷之六・「弘光元年（順治二年）四月戊辰（十六日）」条）。

これ以後、『南渡録』は、五月十日の福王政権崩壊の日まで、偽太子の王之明について言及
はない。おそらく、福王政権は、左良玉の叛乱や清朝の軍事的圧力への対応に追われ、偽太子
の王之明については、そのままになっていたであろう。

以上、検討してきたように、福王政権の南京で官僚をしていた李清が伝えるところによると、
事件そのものは、三月二日の主だった官僚たちによる最初の取り調べで、北來の太子は、「王
之明」であると自白し、決着した。ところが、現政権に対して反感を持っていた知識人たちが
反発したため、九日にあらゆる人たちを集めて公開の取り調べをおこなう。公開で、ニセモノ
であることを示そうとしたのである。その後は、背後関係の取り調べが行われる。そして軍事
的实力者の左良玉と鄭芝龍とがかかわる疑いが出てきた。しかし、福王政権は、そのことをも
み消してしまう。いたずらに軍事的實力者を刺激することを恐れたためであった。しかし、左
良玉は反乱を起こしてしまう。そのため、偽太子の王之明は、処分が決まらないままに獄中で
過ごすことになる。こうして、五月十日の福王政権崩壊の日を迎えることになる（崩壊後の数
日間の偽太子の「王之明」については、拙稿「順治二年（1645）の蘇州（2）」（『経済理論』第
378号）参照）。

おわりに

李清によれば、福王弘光帝自身は、「上（福王弘光帝） 寛慈（思いやりと慈愛がある）な
るも寡斷（決斷に欠ける）なり」（『南渡録』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月丙午（二十三
日）」条）であり、また、「聲色に於いては罕に近づくなり。然れども讀書 少なく、章奏 未
だ能く親裁せず」（『南渡録』卷之六・「隆武二年五月、帝遇害於燕京」条）というような人物
であった。

すると、偽太子が現れた時、ホンモノであれば、「朕（福王弘光帝） 念うに先帝（崇禎帝）
の子なれば、朕（福王弘光帝）の子なり。若し固より眞の東宮なれば、朕（福王弘光帝） 尙
お子無く、即ち他（現れた自称太子）を愛養撫恤せん」（『啓禎記聞録』卷四・一葉）とのべ、

保護しようとしていた、という福王弘光帝の姿は、真実に近かったのかもしれない。

ただ、北來の太子は、すぐに「王之明」であると自白したために、福王弘光帝の落胆と共に、事件は決着した。審理もはっきりと行われたように見える。

ところが、福王政権中枢部の人たちと対立した知識人たちは、福王政権の偽太子への対応を記録して伝えるのに、批判的なコメントを付け加えたり、福王弘光帝や馬士英の発言に悪意を込めてすこし変更したりした。そうした著作を見ると、偽太子があたかもホンモノの太子であったと福王弘光帝や政権中枢部の人たちが考えていたために、あえてニセモノだと断定しようとしたと思わせるような書き方がなされている。また、こうした知識人たちは、いわゆる清流派として今に至るまで高く評価されている。そしてその高く評価される人たちの発言は、真実を伝えているといった思い込みもある。偽太子事件があいまいなままになっているのは、こうしたところに問題があると思われる。では、福王政権に対して批判的な知識人たちはどのような捏造を付け加えていったのであろうか。それについては、次稿で改めて検討したい。

本稿は、和歌山大学経済学部平成 25 年度研修専念制度を利用した研究成果の一部である。

How the Southern Ming Administration Dealt with the Case of Crown Prince

Kunio TAKINO

Abstract

Immediately after the fall of the Ming dynasty, in Nanjing, under the administration of Prince of Fu, there occurred what became known as “the three disputed cases”: the case of the monk Dabei, the case of Crown Prince (the case of the imposter Crown Prince), and the case of imperial consort Tong. This essay seeks to examine the case of Crown Prince. It finds that the regime of Prince of Fu was far from honest in investigating these cases and concluding that the youth in Nanjing who identified himself as the Crown Prince was an imposter. Within the administration of Prince of Fu, however, because there were critical people with knowledge of the matter who shaped public opinion to accept that in fact he was the real Crown Prince, this led to confusion about the matter of the Crown Prince’s real identity. Only now with this essay has this matter been sorted out.